

第零章 春予鈴

猫の居場所

夏編

シナリオ／トロワ
イラスト／ひめぎょう

DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止

はじめに

この度は当サークルの作品をお手に取っていただき、誠にありがとうございます。

当作品は「アズールレーン」の二次創作物となります。

著者の独自解釈やオリジナル設定も含まれますので予めご了承ください。

また性的、暴力的なシーンがございますが、あくまで演出の一環でそれらを助長する目的で表現していません。ご理解いただきますよう、よろしくお願ひします。

当作品の文章はトロワに、イラストはひめぎように著作権は帰属します。

いかなる場合をもつても二次転載行為は許容できません。

ご理解とご協力の方、お願い申し上げます。

では作品をお楽しみください。

0

意識が朦朧とする。

首を強打されたから、などの物理的理由ではない。自分の不甲斐無さに失望しているからだ。

「わか……さま……」

何も着ていない、生まれた姿を無様に晒す少女が、艶やかな黒髪が乱れることも気に問わず必死にこちらへ小さな手を伸ばしている。

華奢な両腕は冷たく短い錠に繋がれ自由に動かすことは出来ない。

しかし、それでも彼女は必死に地面を這う。荒い息使いから彼女の精一杯さが痛いほど伝わってくる。

だがそのスピードは歩くより更に遅く、一〇メートルも離れていないのにこちらに辿り着く

にはまさに日が暮れそうだ。

それぐらいゆっくりなスピードだが諦めず体を動かす。

「わか……さま！」

少女は必死に口を大きく開け、潤んだ目で俺の名を叫ぶ。その声は今にも泣き出しそうなくらい張り詰めており、とてもじゃないが聞くに耐えない。

「――」

俺も彼女に応えるように叫ぼうと口を大きく開く。伸ばしたその手を掴もうと手を伸ばそうとする。しかし首横で煌めく薄く冷たい刃がそれを許そうとしない。

彼女の手を掴もうと少し持ち上がった枷に繋がれていない自由な手は無を掴み、地面に無念を込めた拳を打つことすら叶わず、無念に項垂れた。

だがそんな光景を見ても彼女はこちらに這い寄ることを止めようとしなない。

呼ぶ声も諦めを感じない。歯を食いしばり、流れる涙すら拭おうとしないその姿は刀を首元につけられている程度で諦めている自分よりも何十倍も雄々しく感じる。

そう、この中で諦めているのは俺一人だ。

だが少女がこちらに辿り着くことはなかった。

少女の後ろから初老の男がまるで猫を回収するかのように、彼女の首元とひざ下に手を潜らせ、軽々しく持ち上げる。そしてこちらを見てニヤリと笑うと嫌がる少女の唇を無理やり奪った。

ジタバタと男に抱かれながらも抗うように暴れる彼女。だが抵抗虚しく男は少女を抱きかかえたまま、この場を去った。

最後まで少女は抵抗することは止めず、時折こちらに手を伸ばしていた。

男の背中が完全に見えなくなった頃、俺の首に付けられていた刀は納められ、刀の主も男と同じ方向に歩いて去って行く。

まるで「もう追うな」と言わんばかりの憂いと冷酷を込めた視線を残して。

ああ、これは何の罰なのだろう

彼女に出会ったこと？

俺がここに来たこと？

彼女を愛してしまったこと？

わからない。俺には何もわからない。

解るのなら教えてくれ、山城。

お前と出会ったことは、お前を愛したことは間違いだったのだろうか？

第零章 春 予鈴

1

チリン——チリン——

黒髪の少女が息を切らしながら室内の階段を登っている。

彼女を包んでいる金色の流路と桃色の花の紋様をあしらった漆黒の重桜じゅうおうの民族衣装・和服。その前裾にちよこんと左右対照に付いている計四つの鈴が足が前に出る度、辺りに鳴り響く。それに加え、階段を登る足音もタン、タン、タンとテンポの良い音を奏でる。

もつとも彼女は別に足音で遊んでいるつもりはなく。急げば急ぐほど彼女の意志とは反対に、音たちは無邪気な音を奏で、勝手にはしゃぎだす。

階段の踊り場から続く廊下は、規則的に貼られている窓を除くと白塗りされたコンクリートが横一面に広がっている。その白と合わせて寒色系の華緑青はなろくしょうに塗られたタイルもあつてか、もう春だと言うのに未だ冬の寒さを感じる空気を漂わせていた。

虫の音も無い。

空気も澄み切っているのもあるだろう。足音と鈴の音は心地よい二重奏を響かせる。

一刻でも早く、遠くへ……。

鳴る鈴は焦り急せく彼女への応援歌。しかし残念ながら彼女の耳には届いていないようだ。

チリン――

「はあッ……はあッ……」

階段を登り切った少女は倒れるように廊下と踊り場の境にある防火扉に背を預け、その場に座り込む。

吐く息は仄かに白く、冷めきった空気を温める。もともと熱の籠った吐息はすぐに温度を盗られ、周囲の冷たい空気と同化するのだが。

それでも先程まで走っていたからか、滞留時間は普通に吐く息と比べると気持ち長い。

上下する肩は汗で絡む髪を微かだがなびかせ、少女は乱れた呼吸を整える。

乾く喉は唾液を飲み込むことで誤魔化す。

流石にもう追ってこないか？

少女は横目で階段の下を睨む。そして人の気配がしないことを確認すると、石のように重い足を無理やり動かし、廊下の奥の方へ足を進める。

その時である。

彼女の頭上に生えている猫のような耳が何かを察知したのか、ピクピクと動く。

「……」

少女、扶桑型戦艦二番艦級艦船・山城は寂しそうな目で窓をのぞき込む。

彼女が不意に感じた何か。それは歓声。

窓という強烈なフィルターと音の発生源である地上より遙か高いところにいるせいで普通の耳では聞き取れることは出来ないぐらいの音だったが、動物の繊細な聴力を持つ彼女は聞き取った。

歓声の理由を見た彼女は何かを言おうと一瞬だけ口が開くが、すぐに諦めるように閉口してしまう。そして長く伸びる廊下に視線を移す。

外とは対照的なまでに静寂に包まれた世界。

鈴の小さな音ですら反響する寂しい世界。

その寂しさは彼女の心まで蝕み、山城は悲しそうに目を伏せる。

ここは艦船戦術学園棟。

艦船たちは普段ここで様々な戦術を勉強し、いずれ来るアズールレーン連合軍やそれに連なる国家、そしてセイレーンとの戦いに備えている。

いつもなら多くの艦船たちの賑やかな声が絶え間なく響く軍校でありながらも温かい場所だ。

しかし今日は誰の声も聞こえない。異様なほど静寂に包まれており、彼女以外の気配を全く感じない。

それもそのはず。今日は新兵たちが入営する日。いわば軍港内一のお祭りといっても過言ではない日だ。

この日は大講堂で行われる入営会だけでなく、どこぞの学校のような同好会への勧誘や、手作りポップが微笑ましい食べ物の屋台などが特別出店していたりとまさしく祭りに名前負けしない様相となっている。

チリン――

微かに動いた彼女のふとももが鈴に触れ、哀しみを辺りに広げる。

私も……あの中に入りたい。

再び外を見た少女は恐る恐る憧れを掴もうと手を伸ばす。しかし目の前に広がる見えない壁に指先がぶつかり、「あっ……」と言葉を零し、我に帰った。

「……なに、やってるんだろう。私」

山城は自身の手の平を見つめながら寂しく肩を落とす。

もう自分はあるの中には戻れない。

少女はもう一度、地上へ目を向ける。

瞬間、外で強風が吹いたのか。窓がガタガタと震え、窓の外で綺麗に咲いていた桜の花が舞い上がる。

その綺麗で、しかし儂げな風景を見つめ山城は目を細めた。

私もせめて綺麗に散れたのなら……。

山城は窓の鍵に手を伸ばす。

だがその行動は叶わなかった。

「娼婦艦つーかまーえた」

突如悪寒を纏った声が響く。それを彼女が認識するより早く鍵へ伸びる手が何者かに奪われた。

声と目に映った手にとある人物の影が重なる。欲望を丸出しにした卑劣な顔をした男の影が。

しまった……！

山城は小さなその瞳を大きく見開き、声の方へ振り返ろうとする。

その感情が言葉に乗るよりも早く男に腕を押され、そのまま床に投げられてしまう。

「ひゃっ!？」

床へぶつかった衝撃に山城は思わず小さく悲鳴を上げる。

だがここで呑気に倒れている暇はない。彼女はすかさず男の顔へ再び目を向ける。

「よお」

やっぱり……。

その男はさっきまで山城を追っていた人物だった。

山城は床に倒れているものの、腕を巧みに使い、様子を伺いながらゆっくり後退する。

「近寄らないでください……」

温和な性格の者から受ける拒絶の言葉の威力は計り知れないものだ。

指令部の人間だということを示す白い軍服を着た男は残念そうにため息を漏らす。

「やれやれ。全く、嫌われたもんだな。俺も」

そう言葉を零すも、それとは裏腹に男は山城の身体に乗っかるように浮かぶ豊満な胸へ手を躊躇ためらいなく置く。

「やわこいなあ。いい乳が出る胸だぜ、これは」

そして胸を握り潰すように動く男の手指。山城の表情が歪む。

「やめて！ 放してください！」

「走って興奮したか？ 乳首が勃ってるぞ」

両手を使い、山城はなんとか男の手を剥がそうとする。

だが男は山城の言うことに全く聞く耳を持つとうとしない。抵抗など言わずもがな、更に腕に力を籠め拘束を更に強める。

苦悶を浮かべる山城。それを見て男は笑みを浮かべ、胸部上の触れる度に硬くなる一ヶ所だけ突起している部分を撥ねる。

「んッ、やめて、って！」

山城は拒絶し、怒声を上げるも身体が反応しているのは事実だった。

悶える声には色が乗り、男を無闇に悦ばせていることを彼女自身も感じている。早くどうにかしないと。

そんな彼女の意に反して男の行動はエスカレートしていく。通常の山城型が着る和服と違い、巡来の和服通り足首付近まで伸びるおくみに手を伸ばす。

しかし男がおくみに手をかけるより先に、静かな廊下にパンツと破裂音が短く響いた。

「あ？」

一瞬、男自身も何が起きたのか理解できずにいた。

横目で覗くと山城は涙目を浮かべながら片手は触ろうとしたおくみの上を握りしめており、もう片方の手は顔の横に構えている。

まさかな。

男はふと過った考えをすぐさま捨てる。こんな虫も殺せないような顔をした女に殴られるなどありえない。

しかし連ねるように繰り出された蹴りが腹部にのめり込むと同時に、その考えが正解だったことに気づく。

「がふッ!？」

腹の奥から何かが込み上げる感覚を覚える。どうやら本気で蹴られたようだ。

だが腹部と仰け反った際に打った頭の痛みを感じながら男は笑った。

そうだ、それでいい。

そうじゃなきゃ。狩りは楽しくねえ。

男が倒れたのを見計らい、山城はすぐさま立ち上がり逃げる。

しかし階段の方向に男が倒れたため、廊下の奥へ逃げるしかなく。逃げてはいるものの袋小路に閉じ込められてる気がしてならなかった。

だがここはただの廊下じゃない。学園の廊下だ。学園の廊下なら教室への扉がある。

彼が伸びている間に教室に隠れて巻く。

山城はその希望に賭け、ある程度距離が取れたのを確認すると、あたりの教室の扉に手を掛ける。

しかし現実は残酷だった。

「……………えっ？　なんで……………!？」

何回も横にスライドしようとしても扉は一向に開こうとしない。

取り付けが悪いのか。そう思った彼女は更に力を込め引っ張る。だが結果は相変わらずだった。

「なんで……………なんで開かないの!？」

山城はとりあえずこの扉は諦め次の扉に移る。しかしそちらも先程の扉と同じく開かない。

早くしないと、男が再び起き上がって来る！

焦燥が山城から冷静さを奪う。

「あたりめーだろ。今日は休みだぞ」

突然聞こえた誰かの助言に山城はハッと気が付く。

当たり前なことなのに、なぜ気付かなかったのだろう。

彼女は一瞬、そう自問に陥りかけたが、自分に語り掛けた声の正体に気付き、後ろを振り向く。

「——ッ、きゃッ！」

しかし彼女が振り返るよりも早く、男の腕が彼女の後頭部を捕え、扉へ強引に押し付けた。

「なッ、んで、もう動ける、の……？」

「男をなめんなよ。あんな威力じゃ失神すらしねえよ、普通」

なんとか首の力だけで男の押し付けを返す山城の間に男は鼻で笑う。

同時に荒い息遣いいきづかや小刻みに震えている肩から、この発言は男の強がりでしかないことがわかる。

それを確認した山城は今が好機と捉え、なんとか彼の拘束から抜け出そうと扉を押し、男の腕を押し返そうと模索する。

「いいのか、暴れて？」

もつとも弱っていることを見抜かれるなど、男からしてみると想定済みのことだったのだが。しかし、こんなに上手く踊ってくれるなんて思っていなかった。思わず吹き出しそうになる。

「どういうことですか？」

「どうもこうも、お前が俺らの言うこと逆らったら扶桑ふそうの姉さんの首を晒さらすって約束やくそくだろ？」

その言葉を、姉である扶桑の名を聞いた瞬間、怪訝けげんそうな目で男を睨にらんでいた山城の顔から血の気がサーツと抜けていく。

勝った。

切り札を出すには早すぎるかと一瞬迷ったが正解だったようだ。男は細く微笑む。

「晒さらすって……」

「簡単に言えばちよん切るってことだ」

流石の山城でもその言葉の意味は理解していた。だが知っているからこそ復唱してしまう。

それを聞き逃さなかった男が追い打ちをかけるように分かりやすく説明する。山城の知っていた意味と男の言った意味が見事に噛み合う。すると彼女は項垂れるように床に崩れ落ちた。

「そんなの聞いてない……」

絶望に暮れる彼女が零す言葉を聞き、男は堪らず、愉快そうに笑う。

もうこいつは自分に抵抗することが出来ない。

完全に俺専用の雌だ。と。

「じゃあ、何をすればいいか。わかるよな？ ほら、お前の入りたかった教室の鍵だ」

男はポケットから取り出した教室の鍵を山城の目の前に落とす。

山城は震える手で鍵を拾い、立ち上がり、教室の鍵穴に鍵を突き刺そうとする。

しかし手が震えて鍵がなかなか鍵穴に入らない。

「おいおい、いつもちんこはすんなり入れてるくせに鍵は入れれねえのか？ それとも入れられる方

は慣れてるけど入れる方は慣れてませんってか？ ぎやははは、なっさけねーなあ、おい」

次々に溢れるように出る下劣な言葉を聞き、山城は眉をしかめた。

誰がやりたくてそんなことしていると……。

下唇を食いしぼり、溢れ出てきそうになる涙をこらえる。

「しかし、胸も凄いが、案外ケツもでかいんだな。お前」

「ッ——！」

男は無抵抗な山城の尻たぶを思いつきり叩いたり、尻谷を広げたりして遊ぶ。

しかし、流石にそれに対し不快感を覚えた山城は無意識に男を強く睨んでしまった。

瞬間、今まで笑っていた男の表情が怒りに歪み、山城は「しまった」と目を見開く。

「おいおい、まだ立場が解っていないようだな」

だが時すでに遅く。男は舌打ちをした後、彼女の肩を引き、自らの手で強引に教室の扉を開く。

そして山城を教室に押し入れ、流れるように彼女の脇腹を目掛け蹴りを入れた。

教室内に綺麗に並べられていた机たちの中に山城は投げ込まれる。

大きな音を立て、机と椅子の列は乱れていく。

「あッ……かはッ！ ごホッ、ゴホッ！」

不幸中の幸い、大きな怪我はしなかったものの、木と鉄で出来た物に体をぶつけたのだ。山城は痛みでとてもじゃないが立ち上がれない状態でした。

「ほら、さっさと脱げよ」

しかし男は妥協たきようしない。付近にあった椅子に座り、山城を見つめる。

「げほっ、こほっ！」

体を起こす山城は思わず咳き込む。そして再び男を睨みつける。

相変わらずそのような態度を取る山城に男は苛立ち、椅子から立ちあがり、彼女の前髪を掴む。

「痛い！ 痛いっ！」

「てめえの意見なんて聞いちゃあいねえんだよ」

叫びながら前髪を掴む手にしがみ付く山城。だが男は一向に手を放そうとしない。

「てめえはな、ただ股開けて、ちんこ入れて、ヨガって、受精してりゃあいいんだよ」

崩れた机たちの中に山城は再び投げ入れられる。

その際、頭に付けていた猫の御面が外れ、男の足元に飛んで行った。

「あっ……」

山城は四六時中肌身離さず持っている御面の方に手を伸ばす。

その御面は扶桑から貰った大切なもの。

しかしそれを先に手に取ったのは男だった。

「返して……それだけは返して！」

男から解放された山城は地べたを這い、男の足にしがみ付きながら懇願する。そんな彼女の無様な姿を見て、男は深くため息を吐く。

「俺はお前を抱きに来ただけなのに、お前が拒むからこうなるんだぞ？」

「返して！」

男は確認するように自身の目的を伝える。

しかし山城は子供のように「返して」と繰り返し、聞く耳を持つとしない。

演技か、素か。

どちらにせよその執着心に屈した男は彼女の横に御面を投げる。すると涙を流していた山城の顔が一気に晴れ、御面へと手を伸ばす。

「いいのか？」

だがそれも男の作戦の一つだった。

「それを手に取ったら姉さんの首千切れちまうぞ？」

男は自身の首を右手の親指でゆっくりなぞり、端に到達すると同時に上へ撥ねる。解りやすい斬首のモーションだ。

それを見た瞬間、山城の表情が再び曇る。

「い、いや……そんなのやだ……!」

全く、表情をコロコロ変える、面白い奴だ。男は再び御面を手に取り、自身の頭に抑える。

「じゃあ、やることはひとつだよなあ?」

「で、でも……でも……」

姉の死を持ち出しても山城は相変わらず猫の仮面に執着する。

壊してみたい。

今にも壊れそうな彼女を見て男はそんな衝動に駆られるも相手は紛いなりにも艦船だ。万が一のことがあつては危うい。そのための人質。ひとまず心を落ち着かせるため男は深く息を吐く。

「安心しろ、壊しやしない。ただ預かるだけだ」

笑いながら近くの机の上に御面を置く。

「お前が素直に従うならな」

そう一言、忠告も共に置いて。

「ほら、脱げよ。この面と姉を壊されたくなかったらな……」

山城は一瞬冷たい表情を浮かべ、横目で置かれる御面を見る。

「わかりました！ わかりましたから……！」

それを目視した山城は再び子供のように喚き、自身の和服の帯紐に手を掛けた。

黒の衣服の合間からはらり、はらりと見え隠れする雪のように白い素肌。

反対色が交じり、和服の艶やかな紋様が舞う脱衣は欲情に揺さぶりかけると同時に芸術を見させられているかのような幻覚にも陥る。

特徴的な華麗な曲線を描いた胸が、彼女の動きと共に揺れる。まどついている香水の香りか。時折、

甘い香りが鼻奥をくすぐる。そして、その暴力的な身体とは対照的な童顔に浮かぶ哀しそうな赤い眼。

それは芸術という他、言いようが無く。それほどまで綺麗だった。

「脱げました……」

山城の声で男は我に返る。先程まで華麗に舞っていた彼女はいつの間にか全ての衣類を脱ぎ、生まれたままの姿を男に晒していた。

きめ細かく透き通った肌は全てを鮮やかに際立たす。服の上からもわかるほどに育った胸。その頂点に立つ乳頭から零れるように広がっている桃色の乳輪は今にでも甘く蕩けそうだ。腕で真ん中に押され、綺麗な丸を形崩す胸は若さゆえの弾力と柔らかさを想起させる。

恥ずかしそうにふとももで隠す恥丘付近には、誰かに剃られたのか、それとも先天性なのか。理由は解らないが淫毛は無く、淫唇から漏れた桃色が滲んでいる。

所々浮かぶ青や黒の痣も男からしてみれば良いアクセントであり、出来れば所有権を示す入れ墨でも入れてやりたいところだった。

男は唇に舌を這いずらせながら山城に近付く。

しかし彼女に触れる直前、山城は何かを男に差し出した。

「お願いします……」

「あっ?」

山城から差し出されたのは正方形の銀の包み。男の肉茎に装着するタイプの避妊具、いわばコンドームだった。

「なんだこれ?」

「子供産みたくないんです。避妊具をつけてください。お願いします……」

山城は寂しい目で男に頼み込む。

まだ自分の立場が理解できていないのか。子作りを目的にしている男からしてみれば、その発言は興醒めでしかなかった。

だが山城の願いはコンドームをつけることのみ。だったら……。男の口端が上へ吊り上がる。

「いいぜ?」

男はあっさりとOKを出す。

山城からしているとダメ元での頼みだったらしく、その回答に驚くものの、パアッと明るい笑顔を見せる。

この笑顔が絶望に染まるんだ。すでに心の底からゾクゾクしていて堪らない。

男は心の中で細く微笑んだ。

「ただ、お願いするんなら、それ相応の態度があるよな？」

男はつま先で床を二回ほどノックする。先ほどの発言と合わせて考えると、土下座を強要していることは想像に難しくなかった。

それに気付いた山城は晴らせていた表情をすぐに曇らせる。

それでも……それで避妊具を着装してくれるのなら……。

彼女は両膝を地に着け、頭を下げた。

「お願いします。避妊具をつけてください」

精一杯のお願いだった。

男はそんな彼女の誠意などどうでもよく、ぶっきらぼうに山城の背中にまたがる。そして最高の眺

めに思わず吹き出した。

前からは見えなかったぷっくりと膨れた菊門がはっきりと見える。口では嫌々と言いながらも本能に抗えないか、淫裂の間からは愛液が光っていた。

にもかかわらず、こんな要求をしてくる山城を男はとある作業をしながら鼻で笑った。

「そんな綺麗な言葉使わずにさ、ゴムって言えよ、なあ！」

「ひゃんっ！」

山城の無防備な尻たぶに男の強烈な平手が打たれる。ピュツと飛び出る愛液。純白な肌はみるみるうちに赤く腫れていき、滲む痛みに山城は思わず目頭に涙を浮かべる。

無論、男からしてみれば言葉使いなどどうでもよかった。ただ空気が抜けた時の破裂音をかき消したかったのと、もっと山城に卑猥な言葉ひわいを言わせ羞恥心しゅうちしんを煽あおりたいだけだった。

「ごめんなさい。ゴムをつけてください、お願いします」

山城の発言中、プスツと空気が抜ける音が小さく響く。

男は胸ポケットにシャーペンひれっを仕舞い、これで準備完了、とでも言いたいのだろう。卑劣な笑みを

浮かべた。

「じゃあ付けてよ」

男が工作したコンドームを山城の目の前に落とす。もちろん、銀紙にいれたままだと穴を開けたところがバレバレなためゴムだけを。

彼女はそれに何も疑問を持たず、再び手に取る。

「もちろん、口でな」

「……はい」

「歯、立てんなよ」

悪いことをしていると自覚がある行動をした時、人は胸は高鳴り、恐怖と喜びを覚える。今まさに男の感情がそれだった。

気付くか、気付かないか？

コンドームに息を吹きかける山城を見つめながら、男は脳内で実況を開始する。

だが実況を開始した瞬間、ピューと息が抜ける音が室内に響いた。

やばい、バレたか!? 男の頬に冷や汗が走る。

だが対する山城は、何の音だろう、と一瞬間に思ったが、特段問題視せず、コンドームの上部分を口に咥える。

「しふれいしまふ……」

コンドームを咥えた薄桃色の花卉が、脈打ちながら雄々しく背伸びをする男の肉茎を優しく包む。

「んっ、んくっ。はあ、ちゅっ。ちゅ……」

顎が痛い。息がしにくい。

そう感じながらも山城は「でもこれで子供が出来ないなら」と思いながらコンドームを着装させる。

そのコンドームが穴を開けられずに避妊具としての役割を果たしてないことも知らず。ただただ健気に、その一心を胸に秘め。

ふう、焦った。息が当たる範囲から膨らまないんじゃないか、とは思わなかったが、まさか息が抜けて音が鳴るとは。

珍事例に男は思わず声を上げて笑いそうになっていた。こんな状況でなければこのにやけ顔に疑惑を抱かれていただろう。『猫狩り』を許可してくれた総指揮官には感謝してもしきれない。

「ッ、ふう……」

コンドームをつけ終わり、男の肉茎から口を放す。

しかし、彼女の意思の表れだろう。性に消極的な彼女とは対照的に非常に積極的にコンドームをつけるために行われた口戯^{フエラ}。時間として非常に短いものだったが、山城以外にも女を貪ったことのある男は彼女にとある才能を見出していた。

「お前、口もイけるクチなんだな」

「ど、どういうことですか？」

「こういうことだよ！」

暴力的に叫んだ男は山城の頭を掴み、その口に無理矢理肉茎を突っ込む。

「カほッ!? んぐウ、ガボッ!」

「あー、気持ちいい。喉奥を掘るのたまらないぐらい気持ちいいわ」

いきなり喉奥に突っ込まれた山城は驚きでむせかえる。しかし男は自慰玩具のように山城の口を肉茎で掘り続けた。

「んっん!! ウうぐ!」

無理矢理に喉奥に入れているからか、嘔吐感が込み上げてきている。なのにむせることすら許されない最悪の状態に山城は無駄だとわかっていても男の腹を何度も叩く。

しかし男はそんなことお構いなしに山城の喉奥を攻める。突くたびに醜く歪む少女の表情は彼の支配感を満たしていく。肉茎を引き抜くと下品に零れるよだれすらも男の興奮を責め立てていた。

「ゴホッ、ゲホッゲホッ!」

「おいおい、休むなよ」

男は喉元を押さえむせる彼女の前髪を掴む。そして零れるよだれを巻き取りながら、再び彼女の口内に肉茎を押し込む。

無慈悲に叩かれる酒で膨張した腹部の痛みも性欲の肴でしかない。

それにどう言おうと、どう思おうと山城はもう男の手中にハマっているのだ。その嫌悪さえも愉しむのが大人の道楽というものだろう。

男は細く微笑んだ。

「膺壁とは違う、荒っぽい作りがなんとも斬新な刺激だ。しかも絡みつく猫舌のザラザラ感も結構良いな」

男は勝手に称賛を始める。

しかし山城にそれを悠長ゆうちやうに聞く余裕はなく、腹を叩くことが無駄だと知った彼女は自身の頭を押さえる男の腕を外そうと躍起やっきになっていた。

だが彼女にとって朗報ろうほうなのか。それとも悲報なのかはわからないが、男の肉茎の下部にあるの血管ふくのような管が膨らむのを感じた。

「さて、前哨ぜんせうってわけじゃねえが一発出しとくか」

そう宣言すると急にピストンするスピードが速くなり、更に呼吸がしにくくなる。そして駆け抜けるように男のうめき声と共に山城の口内に子種がバラまかれた。

「うぷっ、コハッ！ カハッ、くふっ、ゲホゴホッゴホ」

出し切った男は彼女の髪から手を放す。そして山城は逃げるように男の肉茎を口から除け、射精された精液を吐き出した。

「おいおい、息するのは構わねえけど精液吐くなよ」

休憩のため椅子に座る男は山城にそう命令する。

しかしすでに精液は吐き出されており、山城はただ困惑の表情を浮かべていた。

「あーあ、勿体ねえなあ。おい」

「なんで、精子が……？」

山城は絶望した目で男を見る。

その目こそ男が望んだ目で、男は思わず吹き出した。

「なんでって。穴開けたからに決まってるんだろ？」

「あひゃひゃひゃひゃ」と男の下劣な笑いが教室に響く。

いやだ。

それだけは嫌だ。

嫌だ。

嫌だ。

嫌だ。

嫌だ。

いやだ。

いやだ。

いやだ。

イヤダ。

イヤダ。

山城の動悸がどんどん早くなっていく。視界が淀んでいく。

自身が押し倒されたことにも気付かず、ただ絶望に暮れていた。

「さて、そろそろ本番と行きましようや」

本人の意思確認なしに山城の足が広げ、そして未だに健全な肉茎を彼女の淫裂に押し付ける。

ズブズブとゆっくりと彼女の中に沈んでいく己の肉茎を見て男は卑劣に笑う。

「ダメ！ 赤ちゃんできちやう！」

しかしカリ首あたりまで入ったところで気を取り戻した山城は男の身体を押し、必死に彼を拒絶する。

今更なその態度に、男も流石に呆れたのか、ため息を吐くと共に首を一周回した。

「何言ってるんだ。作るためにやってんだろが」

そう告げると男も負けじと山城の中に捻じ込んでいく。

「ヤダ、それでもダメなのツ!!」

肉茎を握り、山城は泣き叫ぶ。ここまで子供だとは思わなかった。男は怪訝な顔で山城を見つめる。

これでいい。

山城は心の中で呟く。そう、彼女はこの教室に入ってからここまで演技をしていた。仮面を返せと泣き叫んだことも、コンドームをつけてくれと懇願したことも、コンドームが破れていたことに驚いたことも。もちろん本気で痛かったり息苦しかったことはあったが、殆どが演技だった。自身がどんなに見られようと行為だけ避ければいい。そう考えた山城は敢えて幼稚に振る舞うことで、相手のやる気を削ごうとしていた。

「じゃあ姉が死んでもいいのか？」

「ッ！」

だが姉の死をチラつかされると思わず素に戻ってしまう。本当ならここそ嘘を貫くべきところなんだろうが、関係のない人が巻き込まれてしまうのは彼女としては極力避けたい状況だ。

目を大きく見開き驚く山城。やっぱり。そんな彼女を見て男の中で何かが確信つく。

「なにが猫だよ」

山城の中へ男の肉茎が力押しで挿入されていく。山城は股に力を込め、小刻みに首を横に振りなが

ら抵抗する。

「やだやだやだやだ！」

確信はあった。最初の仮面を取り上げた時だ。あの時、なにかを探っているような、そんな態度を取っている気がしていた。そして先程一瞬見せた顔で全てを理解した。男は山城に告げる。

「演技するなよ、女狐」

バレ、た……？ 山城の顔が蒼白になっていく。いやブラフをかけてるだけだ。演技をし続けないと。山城はそう自身に発破をかけるも、口が震えて言葉が出ない。

彼女の動揺して隙だらけな態度を見て卑劣な笑みを作る。そしてこれを機と見て、男は一気に腰を打ち付け、山城の最奥に肉茎を叩きつけた。

「ほうら、入ったあ！」

「アアンツ！」

挿入と同時に最奥にある子宮の入り口を突かれた山城は声をあげ、身体を震わす。その声は歓喜にも悲鳴にも聞こえる声だった。

「なんだ、なんだかんだお前も楽しみにしてたんじゃないか」

震える彼女を見て男は晒う。

違う、私はこんなこと望んでいない。彼女は唇を噛みしめながら、必死に首を横に振り、否定する。だが彼女自身も解らなかった。先程の声が本能から出たものなのか、それとも自身の快楽から飛び出したものなのか。

「そんなこと言ってもお前のアソコはもうビショビショだけだな。前戯もしてないのに」

しかし山城の心が「気持ち悪い」の一色に染まっていたのは確かだった。自分の体内に異物が入ってきている、その感触に嫌悪する。もう両手で数えれないほどは抱かれているが、彼女は未だこの感覚に慣れないでいた。

「アっぐう……あ、はアっはあ……」

だがこの感情は男を拒絶しているから芽生える感情ではないのか、と山城は自身を疑う。つまりただの強がり。自身はすでに堕ちきっている。現に彼女の気持ちとは裏腹に身体は勝手に反応してしまっている。

火照る身体は欲求を駆り立てるフェロモンを放ち、侵入する肉茎を強く引き締め男を悦ばせる。

「んっツツツ、やあ、うっ……」

それでも、そう自身でも感付きつつあるものの、山城は男を拒絶し続ける。身体を揺らされながらも必死に両手で口元を覆い隠し、声を殺す。

そろそろ頃合いか。男は肉茎を山城の最奥まで押し付ける。

「かはッ……奥、痛っ、い……！」

山城は苦悶に顔を歪める。しかし男はお構いなしに押し付け続け、肉茎を甘く吸う子宮口の感触を楽しむ。

「良いこと教えてやるよ」

「良い、こ……きヤン！」

答えを返せば、声を出せば続いて音が漏れる。男はそのタイミングを狙って山城に腰を叩き付ける。室内に響く淫らな悲鳴。山城は耳に響く自身であり自身ではない声を抑えようと、口元に置いた手に更に力を込めようとする。

しかし男がそれを許さなかった。彼女の腕を奪い、肘を不自然な方向に曲げるように押さえる。

「いたツイ……！ あんツ！ あつ、あつ、あつ、ふあああああ！」

「なんだ。良い声が出るじゃないか」

肉体的痛みは性的快楽により上書きされていく。腕の痛みも程よく気持ちよく感じてしまう。小刻みに子宮口を叩く男の肉茎を求めるように締まる膣肉の感覚で山城はそう自覚する。

愉快そうに晒むいながら、男はもう片方の手で、水毬のように形を変えながら淫らに揺れる胸をひとつすくいあげる様に掴む。まだ寒さが残る季節だというのに、しっとりと感じる汗を纏う肉の感触を男は愉しむ。先端にある小さな蕾も桜色に芽吹いている。

「ひゃツ!？」

乳頭を撥ひねると山城は短く悲鳴を上げる。その時だった。今までにない感覚が山城の体内に駆け巡る。羞恥しゆうちにも悦楽えつらくにも幸福にも似た感覚。また違う自分が暴れている。山城はその感覚に恐怖を覚えた。

しかし男は手を休めることはない。山城が謎の感覚に啞然あぜんとしている、その隙に彼女の腕から手を

放し、その手を今度は山城の顎に添えた。

「えっ……？」

頬に感じた男の手の感触で山城は我に返る。しかし時すでに遅く、男は自身の唇を彼女の唇に強引に押し付けていた。

「んんっ!? んんん！」

更に男の舌が山城の口の中に入ろうと歯の隙間に押し付けられる。山城は口を堅く閉じ、なんとか侵入を阻止しようと頑張る。だが膣に潜む肉茎が、乳房を掴む手が山城の思考を拒む。それから間もなくして、健闘虚しく、男の舌の侵入を許してしまう。

「んんんッ!?」

更なる嫌悪を覚え、身体をジタバタと暴れ動かす。逃げる舌は瞬く間に男の下に絡め取られ、男の領地に連れ込まれる。しかし山城はそれを拒絶し、自身の口に舌を戻す。そんな綱引きを行う内に山城の目がトロンと蕩よけたように下がる。

頃合いか。それを目視した男は、洋菓子のように甘く柔らかい唇から己の唇を放し、再び彼女の膣

へ主を移す。

「ケホッ、コホッ……ヒャあ!？」

二人の唇を繋ぐ白い橋は激しい揺れと共に崩落する。彼女の目はもはや虚ろで、よだれも止めどなく顎を伝っている。

そろそろ我慢も限界か？ 歪み乱れる彼女の顔を見て男が細く微笑む。しかし力の限り山城の中を蹂躪する男の肉茎も限界を迎えようとしていた。

「おっと、話の途中だったな。良いことやってやつ」

しかしここで果てたら楽しくない。男は自身を抑えるのも含め、一度腰を止めた。不思議そうに男の顔を覗く山城。その表情は精子を待ったただの雌でしかなかった。欲情を誘う彼女の要望に応えなかった男だったが、息を呑み自制する。

もちろん山城は男を求めるために振り向いたのではなく、男の言う「良いこと」が気になったため振り向いたつもりだった。しかし自身が全く違う感情の顔をしているとは夢にも思わないだろう。完全な誤算だが彼女は未だそれに気付いていない。焦点の定まらない蕩けた眼はニヤけた男の顔を映し

ている。

だがその表情も次の言葉で一気に凍り付いた。

「扶桑姉さんの首切るってやつ。あれ嘘だから」

無慈悲な真実が教室内に響く。その瞬間、絶望に染まった表情を浮かべる山城の膾がキュツと締まった。

「……えっ……？」

「おほっお、すげえ締め付け」

男の高噛いが響く。

聞いてない？ 当たり前だ。そんな約束、鼻っからしてないのだから。本当に、純粋な心を黒く染めるのは楽しい。

「なんで、そんな嘘を、ツ、ああッ！」

山城は理由を問う。だがそれと同時に男は再び腰を動かし始め、山城は顔を歪める。

「だってああでも言わないと従わなかったら？」

自身を屈服させるために平気で嘘を吐く。これが男……。

だがこれで抵抗出来ない理由は消えた。山城は全身に力を入れ、男の拘束から抜け出そうと模索する。

「おいおい、力んでいいのか？」

男の腰を動かす速度が上がる。山城の膣口に収まっている肉茎が膨らむ。先程口内で感じたそれに山城の身体は固まる。

「いや……」

「そろそろ出すぞお……」

「やめて、やめてえ！」

山城は大声で泣き叫び暴れる。しかし束縛は解けず、それどころか男は体を山城に密着させ完全に拘束する。少女はただ射精までのカウントダウンを待つしかなかった。

「出るっ！」

「嫌ああアアアアっ！」

絶頂に達した男の肉茎から大量の子種が山城の中に吐き出される。

本来なら肉茎を包んでいるゴムが子種を保護するはずなのだが、ゴムの先端に開いた小さな小さな穴から子種は溢れ出し、ゴムを決壊けっかいさせた。

膣に流れ込む子種の熱さはまるでマグマのようで、彼女が瀬戸際で守っていた理性を一瞬で溶かしてしまふ。山城の体が大きく仰け反り、痙攣する。

イッてしまった……。

そう認めめた瞬間、山城の視界はまるで微睡まどろみに誘われるかのように蕩とろけ出す。

掠かすれる意識の中、未だに全身を微動みどうだする快樂の痙攣けいれんに放蕩ほうとうする自身に嫌悪感を抱く。拒絶しながらも悦えつに浸っている自身に。

その悔しさあまり、熱い吐息が吐き出される艶あでやかに湿った唇を悔しそうに噛み締める。そして目頭には涙が浮かび上がっていた。

しかしそれでも彼女は奥歯を噛み締め、乱れた髪で目を隠しながら必死に声を殺して泣き、弱さを隠す。それが彼女が未だこの行為を否定している何よりの証拠なのだが、彼女自身それに気付いていない。

だが山城の意思とは裏腹に、男からして見ると彼女が堕ちようが堕ちまいがどうでもよく、ただ抱いてるというのに自身の気持ちに正直にならない女にただただ苛立ちを覚えていた。

全然愉たのしくない。男は顔をしかめ、舌を打つ。

「なんで声出さないんだよ。ガキのように泣き崩れるよ。つまんねえだろ。さっきまでやってたじゃねえか」

山城の胸を弄りながら男は彼女に問いかける。

しかし山城は頑としても男と視線を合わせようとしなない。その態度に男は苛立ち再び舌を打つ。

「おい、聞いてんのかよ。なあ！」

「っ！」

ぶっきらぼうに男は山城の前髪を掴み、顔を更に床に押し付ける。だがそれでも彼女は相変わらず

強固な態度を崩そうとしない。

しかし乱れた髪の間から見えた彼女の弱さを男は見逃さなかった。

「なんだ？ 自分が変態女だって知ってシヨツク受けてるのか？」

下衆げすに冷笑れいしょうし山城を煽る男。だが山城が男に向けているのは完全な怒りの目。下唇を噛みしめながら放つ荒い息遣いは、猫の威嚇にも似ていた。山城は自身の頭を掴む男の腕を握る。その力は今まで感じたことないほど強く、男は少したじろく。

「お前、つまんねえ」

男は強がり捨て吐くと、山城から肉茎を引き抜き立ち上がった。

なにが娼婦艦だ。ただのバケモノじゃねえか。未だ腕に感じる彼女の指圧に男は体を震わせる。

終わった……？

そう感じた山城は男を注視しつつも四つん這いになり、脱いだ服の方に向かう。

もう嫌だ。自室に隠れておこう。誰とも会いたくない。

再び山城の瞳に涙が募る。股から伝い落ちる愛液や精液などお構いなく、ただひたすらに服の方へ向かう。

あと一步。あと一步で服に手が届く。

その時だった。不意に山城の腰に手が添えられる。

「えっ……」

振り向くより早く、白く濡れた淫裂いんれつに再び、男の肉茎が挿入された。

「ひやあああ！」

気を抜いていたからだろうか。山城は先程より感情を表面化させる。

それは声だけでなく、身体の方にも及んでいた。

無理矢理挿入したとはいえ、繰り返すピストンを力の限り締め切った膣で接待する。未だ微かに瘻

攀している膺のバイブレーションも相まって、今まで感じたことのない快樂が男を襲う。

こりやあ人気者になるはずだ。男は素直に太鼓判を押す。

「はは、すげえ締め付け。これだかは強姦はやめられねえ」

「そう、こいつはただのメス。」

なのに何を恐怖しているのか。獣に恐怖しといて調教など出来るはずがない。叩いて、叩いて、叩いて！ 反抗しないように徹底的に教え込まないと。

「もうやだ！ やめて、気持ち悪いの！」

「おっ、いい声で哭くじゃねえか。それだよ、その声だよ」

先ほどと違い己の感情を素直に吐く山城に男は晒むう。

「ッ、ああ!!」

この身体も、この胸も、この膺も、この哭なき声も。いまは一時的なものだが、この胎に子を孕ませたら全てが手に入る。

「らめえなの！ 変になっちゃう、頭が変になっちゃうのおお！」

「はは、そのままイキ狂えよ。そっちの方がお前にとっても最良の道だろうに」

玩具に理性は要らない。忠誠さえあればそれ以上何も望まない。

だから彼女がこの過程で壊れても男からしてみれば痛くもかゆくもない。むしろ自身の好みの形に作り替えれるのだ。本望と言っても過言ではないだろう。

「ヤツ、んっ！ 嫌い！ 頭が白くなるの、ひヤウ！ 嫌なの！」

「なにも失うものが無いくせに随分と贅沢な意見だ、なあ!? おらああああ！」

「んっニヤあアアッっ!!」

再び山城の中に吐き出される白濁はくたくの液。それに合わせ山城も再び身体を痙攣させるが、今度は尿道から透明な液体を尿のように吹き出した。

「すげえ潮吹きだな、おい。ご自慢の服にもぶつかかったぜ？」

山城の尻を叩きながら男は彼女を卑劣ひれつに褒める。だが山城は初めて触れる自身の奥に隠されていた淫乱な性格に絶望し、その場に大声をあげ泣き崩れた。

そんな彼女を見て男は笑い、晒わらい、嘔わらう。

「やっぱりお前、泣いてる顔が一番似合うわ」

そして男はまだ元気が残っている肉茎を再び彼女の中に入れた。

×
×
×

その後、行為が終わった頃には外は暗く、あの賑やかな声はすでに聞こえなくなっていた。

教室に残された山城は腹の上に投げ捨てられた性液まみれのコンドームと姉から貰った猫のお面を見つめる。

そして閉じることの出来なくなった瞳をパクパクと動かしながら、一人声を殺して、枯れ果てた涙で頬を濡らした。

◇



猫狩り

ルールは簡単。逃げる猫を追って捕まえるだけ。

本来なら飼うことも殺すことも猟師の好きにしているのだが、当基地で行う猫狩りに使われる猫はボスの妻の妹のため殺すことは禁止されている。

飼うのも捕まえてから五時間だけという制限時間付き。リリースしてから一時間は先に捕まえた猟師は彼女を触ることを許されない。

なんとも理不尽な内容だが、それでも男たちが群がるのは子を成せたのなら彼女を手中に治めることが出来るっていう褒美があるからだろう。

もつとも彼女が男を狩ることに何ら禁止されていないのだが、な。



0..0

ここは我々が住む地球に似た、地上の七〇パーセントが海で覆われている星。

我々以上に水と共に暮らしており、そのため「水の上を歩く」、「液体の部分状態変化」と言った我々が水に対して夢見るような技術は当たり前のように普及している。

しかしそれ故に海域問題が国々を悩ます。

膨大すぎる海域は人の手に余る代物で、地図で可視化されているとは言え、あと少しと魔が指す者は少なくなく、どこの国でもほぼ日常的に領海侵犯が起きていた。

そのため常日常から、まるで天気予報や株価のように海域侵犯情報は国民へ伝達されてしまうのだが、それでも戦争まで行かないのは最後に残った良心だったのかもしれない。

そんな危うい亀裂の入った世界を割るようにあいつらは現れた。

最初の邂逅は非常に穏やかなものだった。

無知な人々は未確認生命体に対し、嬉々と近付く。白いというには白すぎる肌と対照的な機械のよ
うな服がとても特徴的で、新たな深海生物の一種と見込んだ者もいた。

だがその予想は大きく外れる。

未確認海洋生物兵器群・セイレーン。

伝説の海の怪物の名を名乗る奴らは未だ人が辿り着けていない兵器で野次馬たちを灰に帰した。

そして一台だけ残ったカメラに対し堂々と宣戦布告を宣言する。

「お前らの文明を破壊する」
と。

それを聞きつけたユニオン、ロイヤル、重桜、鉄血てっけつの世界四強国は緊急で、あくまで一時的にはあるが、協定を結び、ミアズールレーンミと呼ばれる軍事連合を結成しセイレーンに対抗して行く。

しかし実力差は想像以上だった。

各国の最先端技術は奴らに対し豆鉄砲ほどしか効果がなく、その豆鉄砲を軸に組まれるのだ。戦略など意味を成さず、気付けば人類の九割が火の海に消えていつていた。

もう終末を待つしかないのか——？

まるでかの伝説のように歌い、戦士たちを貪る敵に対し四大国はそう嗚咽おえつを零し、頭を抱え嘆きなげ始める。

「伝説のセイレーンは歌を聞いても生き残った人間がいたら死ぬ運命にあった、それ以外に彼女らを倒したという文言はない」

ある日、古代学者から告げられた言葉。絶望しか写らない言葉に思わず古代学者に殴り掛かる者も

いた。

だが同時にこう考えた者もいた。

「『人間』にセイレーンを倒すことが出来ないなら『他の生物』でなら可能なのでは？」

そんな時である。

突如彼らの前に現れたのは、後に艦船KANISENと呼ばれるセイレーンに対抗する唯一の手段の素体オージェルだった。

猫の耳を生やしたライトグリーンの髪をなびかせる少女は、長すぎる裾を口元に当て、神秘的に光放つ手のひら大の青い箱を机の上に置く。

「決して安くない買い物ですよ。世界の命運を賭けて、貴方がたはこれをご購入されますか
や？」

忠告する彼女の目は真剣だった。それほどリスクを背負うものなのだろう、と首脳陣たちは悟る。

だがそれが現実を打破するためにどうしても必要なものなら……。

首脳陣たちは悪魔に魂を売る覚悟で首を縦に振った。

「お買い上げ、ありがとうございます。……にゃあ」

こうして各国は艦船という戦力を手に入れ、セイレーンを一時的に追い返すことに成功。黒く曇る空も晴れ、硝煙と人血が混じる海も次第に青を取り戻して行き、一時的な平穏を得ることを成功した。

しかしこの後、このメンタルキューブの使用方針の違いにより、重桜・鉄血の二国はアズールレーンから脱退。新たに『レッドアクシズ連合』を作り上げ、アズールレーン連合に戦争を仕掛けていくのであった。



そしてそれから余十年ほど経ち現代。

とある少年は淹れたてのコーヒーを飲みながら窓の外を見つめていた。

窓の外は青い空と青い海が地平の向こうまで広がっており、すっかり気を保たないと吸い込まれてしまいうような幻覚に陥るほど。

そんな絶景が見えるここはレッドアクシズ所属の島国、かつての四強国のひとつだった重桜の御陀おだぼら腹県山百合市の海岸部に在地している軍港、山百合中央基地だ。

そこの技術開発部、通称「技術部」の棟とうに少年はいる。

この基地はセイレーン侵略期の頃に建設された軍港であり、間も無く築三十年経つ老舗基地のひとつ

つだ。

にもかかわらず、老朽化をあまり感じさせない清潔感が漂わせているのはこの基地で働いてきた者たちがまごころを込めて使ってきたからなのだろう。

厳密な理由はわからないが、この少年は勝手にそう認識している。

そんな能天気な考えを持つ彼の名は幸代ゆきしろ 若葉わかば。今年度入営した新米指揮官……ではなく新米技術者だ。

若気の至りか、茶色に染めてる髪は本人の意思とは裏腹に他人から注目を集めてしまい、先輩から喧嘩を売られることもしばしば。

しかし彼が目立つのはなにも悪評ばかりではない。仕事面ではまだ入営して一ヶ月も経っていないのに技術長から一目置かれるほど優秀。こんなご時世でなければ世界に羽ばたいていてもおかしくない逸材とまで豪語されるほどだ。

それも手伝って目の敵にされやすいのだが。彼はそれに気付かぬまま今日も仕事に励む。

樽をすればなんとやら。とんとん、と勝手口の裏側から扉を叩く音が事務所の中に響き渡る。

「失礼します。今期作製予定兵器の設計図をお持ちしました！」

その声を聞き、若葉は「どうぞ」と来客者を快く受け入れる。そうして部屋に入ってきたのは、狐を彷彿させるような耳が特徴的な川内型軽巡洋艦三番艦級艦船・那珂なだった。

「ありがとうございます。その机に置いといて。あとで技術長に渡しとくよ」

若葉は軽快な笑みで彼女に指示する。それに対し彼女も笑顔で返す。しかし彼女の持っている設計図はたったの一枚。

「いいですね。技術部は暇そうで」

那珂は若葉に言われたように机の上へ紙切れをヒラリと置くと同時に笑顔のまま、そう冷ややかに皮肉を吐く。

「軍事部だって似たような状態だろ？」

しかし若葉はその挑発に乗ることなく、那珂に皮肉を投げ返す。彼女はそれを聞き寂しく笑った。

そう。現実問題、暇なのは技術部だけではない。指令部も軍事部も、アズールレーン連合国との睨にらみ合いが続く今、迂闊うかつに手が出せないため軽率な動きが取れないのだ。

皮肉なものだが、この機にセイレーンたちが侵略再開してくれたら隠れて新兵器の開発ぐらいは許してもらえるだろう。しかしあくまでそれは妄想の域を出ず、現状、各国はただただ無駄な時間を浪費ろうひしていくのだった。

「じゃあさ、今晚飲みに行こうよ、那珂ちゃん！」

そんな沈んだ空気の中、不意に明るい声と共に彼女の肩に誰かが抱き着いてくる。

「きゃあッ!？」

那珂は短く悲鳴を上げた後、後ろを振り向き声の主の顔を見る。

「ははっ、驚いた？」

笑いながら彼女の肩から手を外す彼は若葉の同期である篠山。新人たちのムードメーカーだ。

彼は那珂の担当指揮官と入営以前から交流があり、彼女とはここ以外でもよく顔を合わすぐらいの

仲だった。

なので肩を叩いたのが彼だと知った那珂は、怪訝けげんな顔は相変わらずだったが、ため息を吐き、何事もなかったかのように返答する。

「残念でしたー、今日は指揮官さまとお食事に行くので行けませーん」

「じゃあ俺も行くー」

「ダメです」

「えー、こないだはおたくの指揮官とも飲みに行ったじゃん」

「でも今日はダメですー！」

体をペタペタと触れ合いながら言い合う二人。傍から見たら盛った学生にしか見えない。

そんな二人を見て若葉は思わずため息を吐く。

「朝っぱらから盛んな」

「あつ。ち、違いますよ！ 篠山さんとはそういう関係じゃなくてですね！」

若葉の忠告を聞いた那珂は、突然顔を赤くして取り乱す。そんな那珂とは対照的にニシシと笑う篠

山を見て、若葉は更に一層呆れる。

「そ。じゃあ、俺は帰るわ」

そう手を上げ篠山に挨拶すると若葉はロッカー室に荷物を取りに行こうと足を向ける。

「あつ、そうか。若葉、今日早番だったか」

「えっ、そうだったんですか？ おつかれさまです。気をつけてお帰りくださいね」

やっぱりどう見てもそういう関係にしか見えない。本人らが違うというのだから違うのだろうか。

見送る二人に若葉は手を浅く上げ、「じゃ」と一言だけ言葉を残し。事務所を後にした。

羨ましいとは思わない。だが楽しそうだな、とは思った。

ああいう関係を見ると、「相棒」という存在が欲しくなってしまう。

若葉は廊下で一人小さくため息を吐いた。

×
×
×

「ふわあ〜」

ロッカー室から自分の荷物を取った若葉は大あくびをしながら二階から一階に繋がる階段へ向かっていた。

しかし早番がこんなに眠いとは。早番はキツイと噂ぐらいには聞いていたが、初めての体験にその言葉がまだぬるいことに気付いた。

もともと体質なんかの関係もあるのだろうが、それでも若葉はカフェインでも摂取して無理やり覚醒していないと、とてもじゃないがやってられなかった。

思わず足がふらつき、壁に肩をぶつける。わずか数メートル先は階段がある部屋で、あやうく階段から転げ落ちるところだった。これに冷や汗を流さない猛者はいないだろう。

うっかり階段から落ちたりしないようにしないと。若葉はぼやける視界で階段の下を捉える。そこに映る、普段は見ない青い何かも目の残像だと勝手に処理した。

「おや、若葉殿。今日はもうあがりですか？」

しかしその青は那珂の姉艦にあたる川内型軽巡洋艦二番艦級艦船・神通の髪色じんつうだった。

最初はその声、そして徐々に成していく人の形に若葉は一瞬だけ呆気を取られたような表情を見せた。

「ああ、神通か。うん。今日早番だったから、もう帰るよ」

「それはそれは」

階段を下りながら若葉は答える。

それを聞いた神通は悪戯な笑みを浮かべ、若葉とは逆に階段を昇り始めた。そして二人がすれ違おうとした刹那、神通は若葉を捕まえる。

「えっ?」

最初に感じたのは甘い華の香り。恐らく神通が身に着けている香水のモノだろう。フローラルな香りは眠気を更に誘う。更に彼の顔を包む胸と毛皮の二つの柔らかさはまさに殺人級で、若葉は思わず体重の全てを神通に預けてしまう。

しかし流石艦船と言ったところか。女性ではあるものの全然動じていない。

「早朝からお勤めご苦労様でした。今日は御自室でゆっくりと休んでください」

「あ、ありがとうございます……」

まるで我が子を愛しむように神通は抱擁ほうようした若葉の頭を撫でる。それに対し若葉は礼を言うものの、
我に返った彼は彼女から視線を逸らす。その顔は熟れた林檎のように真っ赤に染まっていた。

可愛い♡♡♡

神通は胸の中で悶もたえる。狐を連想させる耳と尻尾ははたはたと音を鳴らしながら、彼女の心情に連動するように動いていた。

しかし表情は相変わらず、優しく微笑んだ姿勢を崩そうとしない。

神通の腹を押し、若葉は拘束から抜け出す。

彼女と会ったら毎回こんな風に弄ばれる。普段冷静に振る舞っている故のガス抜きか。若葉的には、

というより男の本能からだろう。嫌な気分にはならないので彼女を強く否定したりはしない。

名残惜しそうに神通は若葉を手放す。しかしその瞬間、彼に伝えることがあったことを思い出し、いきなりオフモードから仕事モードにスイッチが切り替わる。

「そういえば。話は変わりますが、技術部の方の寮の方に空きが出来たのですが、住居を移す気はございませんか？ この間、そのような話をしていらしたでしょう」

もはや豹変ひょうへんに近い変わり身に若葉は呆れつつ、以前彼女に話したことを思い出す。

「こないだ愚痴ったこと覚えてくれてたんだ。ありがとう」

若葉は部屋数の問題で現在技術部用の寮ではなく、基地の外れにある、むかし指令部が使っていた寮を使っている。

周囲にある海岸や暗い森林も手伝ってか、突然テレビの電源が入るとか二階への階段が一段無くなっているなどオカルト紛いな噂が後を絶たない。故に現在は若葉を含めて二名しかその寮を利用して
いない。

若葉的にはオカルトの話は関してはさして興味ないのだが、如何いかんせん事務所への距離が技術部用の

寮と比べて倍ほど遠いのが難点で、いざ呼び出されてもどうしても皆より遅れる。もしくは疲れた状態で現場に入るため効率が悪いと嘆いていた。

しかし一か月経った今、彼の中ではその苦はすでにどうでもいいことになっていて、それよりもまた荷物を纏める方が苦だなと若葉は感じた。

「でもいいや。今更引つ越しとかめんどくさいし」

首を横に振りながら笑う若葉を見て神通もまた笑う。

全く、正直な人だ。

「それもそうですね。私としたことが。過ぎた心配でした」

「いや、わざわざありがとう。じゃあ」

そう言い残し、背を向け去って行く若葉。

「ええ、お気をつけて」

その背に神通は朗らかな笑みを浮かべながら手を振り、謝礼を述べる。

誰に対しても友好的な態度を取る若葉。

確かに傍から見れば無礼とも取れるが、それが彼なりのコミュニケーション方法なのだ。それに神通からしてみれば、妙にかしこまられるよりそちらの方が親しみが持てて良い。

ああ、私の指揮官殿もあんな感じだったらな。

神通は遠ざかっていく彼を見えなくなるまで少し悔しそうに見つめた。

× × ×

人間には三大欲と言うものがある。

食欲と睡眠欲、そして性欲だ。

この三大欲は脳内で勝手に他の行動より優先事項が高く設定されている。腹が減れば腹の音は鳴るし、眠くなれば瞼が落ちるし、好みの異性を見つけたらドギマギしてしまう。

だがその中でもやはり優先順位というものがあり、それは人それぞれ。

若葉の場合、睡眠欲が最優先順位らしく、さきほどの色仕掛けでは一時的な刺激にしかならないようだ。眠気に誘われ、ふらふらとした足取りで帰路を辿っている。

途中、職員たちの憩いの場であるメインストリートを横切る。

本日は別段、祝日でも休日でも週末でもない。と言うのに、賑やかな声があちらこちらから響いているのがわかる。

別に不思議なことではない。この軍港のおおよその部署がシフト勤務を導入しているので、本日が休日の者がいても何ら不思議ではない。

そんな彼らが注文したのだろう。美味しそうな料理の匂い漂ってくる。

しかし若葉はそんなもの目もくれず、通り過ぎていってしまう。

舗装された通りを超え、若葉はジャリ道に足を踏み入れた。

メインストリート前と比べると整備の度合いが天地の差ほどあるように感じるが、別にここは未開の地でもなければ立ち入り禁止地区でもない。

ちようどこのあたりが事務所から彼の住む寮まで折り返し地点であり、この先に若葉の住む旧寮が存在する。ここを超えてしまえば発電所ぐらいいしか目立ったものはなく、途中角を一回曲がるが、ほぼ一本道で辿り着くことが出来る。

人通りもない。他に誘惑的なものも特にない。ここで寝ても誰にも起こされないことだろう。

……いつそのこと本当に寝てしまおうか？

なんて冗談を浮かばせながらも若葉は一步一步と足を前へ進める。

「……ん？」

そんな時だった。また見慣れない色が視界にチラつく。

足を進めるほどその色は斑まだらに散らばっており、やがて見つけた大きく擦れた色を見て彼はその色

の名を口にする。

「血……?」

流石の若葉の目も一気に冴える。

血を追うとどうやら発電所の方に向かっていているようだ。しかし怪我をした者はまともに歩けない状態にあるのか。定期的にある大きく擦れた血痕を見て若葉は目を細める。

……どうする。ここで見て見ぬフリをしても誰にも咎められることはない。

これが何かの事件に関係しているなら尚の事。まだ関係のない潔白を保っていられる。

「馬鹿言うなよ」

若葉は両頬を叩き、眠りを完全に覚ます。

見捨てて、これで死なれたりしたら夢見が悪い。

若葉は発電所の方に駆ける。

徐々に聞こえてくる人の荒い呼吸音、そして濃くなっていく鉄の臭いが怪我人の元に近付いていることを確信させる。

発電所前は草が生い茂っていた。何年も手入れされていないのだろう。しかしその草々にも血が付着していてどちらに行ったかなど迷わずにすんだ。

若葉は飛び交う虫など無視し、ガムシヤラに草を掻き分け進む。

そして辿ったその先には発電所があり、長い艶のある黒い髪が特徴的な少女が背を預けていた。

「おい、大丈夫か!？」

彼の声で彼女の頭上の狼の耳がピクピクと反応を示す。それに合わせゆっくりと開く赤い眼。

その顔は青ざめ、けだるげ。息も荒いことから相当良くない状態であることが解る。

若葉は駆け寄り彼女の肩を抱こうとする。

だが、それより早く彼の目の前で一閃。彼女の手が彼を拒む。

「だれ、アンタ？」

荒い呼吸を無理やり抑え、少女は低い声で問う。赤い大きなその瞳は若葉を睨むその様は、頭上に ついている獣の耳も相まって、まるで獲物を狙う狼のような凄まじい威圧感を放っている。

「俺は……ん？」

若葉はそれに怯えることなく、彼女の問いに答えようとする。

だが突然、手になにか濡れたものを感じた。雨は降っていないのに何故？

不審に思った若葉は足元を見る。

「……え……」

見なければ、良かった。固唾を飲む彼は思わず絶句し後悔した。

いや、兆候ちやうこうはあった。先ほどの血痕けっこんたちから重傷だとは思っていたが、彼女を探す一心でその覚悟

が出来ていなかったのだ。

初心者意見ではあるが彼女の怪我は重症ではなく致命傷。いまの若葉では手の施しようのない状態にあった。

血管を傷つけたのか、少女の右の裂傷した膝小僧から溢れる血は間欠泉ように沸き上がっており、一向に止まる様子がない。もはや土の許容水量を超えているのだろう。足の下には血の水溜りが出来ていた。

そこから流れて来た血に若葉は触れたのだ。自ずと手は赤に染まり、彼は後ろに尻込む。

「お前、この怪我……」

助けないと、いけないのに……。

じゃないとここに来た意味がないのに……。

なぜ、怪我をしていない俺のほうが震えているのだろうか。

消毒……の前に止血か。とにかく特務工作艦級艦船・明石の^{あかし}ところに行かないと……。

やることはわかっている。なのに若葉の身体は硬直し、動けずいた。

もはやこの男の目には先程の勇ましきはない。すっかり恐怖に染まりきってしまった。

見当違いだったとはいえ、少し期待した自分がバカに見える。

「別に大したことないわよ」

強がり^{くもん}を吐き、少女は苦悶を浮かべながら立とうとする。

しかし怪我をしている膝はまともに動こうとせず、すぐに崩れ、血溜まりに肩から落ちていった。

「あ……ああ……お、おい！ 大丈夫か!!」

未だ恐怖心が抜けない若葉だったが、目の前で倒れた彼女を無視することも出来ず、近付き、その肩をゆすり生存確認する。

「これが大丈夫だと思うなら私を助ける前に眼科行けば？」

悪態をついているものの少女の声はとても弱々しい。

これが命が消えると言うことなのか？

若葉の唇は恐怖に震え、笑えない冗談に対し「馬鹿野郎」と罵ることすらできない状態だった。

しかしこのままだと本当に命が消えてしまう。そんなの嫌だ。目覚めが悪いどころの問題じゃない。

このままでは一生の後悔になってしまう。

そう思った瞬間、なにかのスイッチが入ったのを感じた。

若葉は咄嗟に上着を脱ぎ、血泥など気にせず必死に彼女の左膝に上着の腕を巻く。力を無駄に入れすぎたり、誤って自ら泥に突っ込んだりして、その動きはまさに無我夢中。

「ふれ、るな……つての……」

それでも強がりと言う少女。しかし彼を押しその手は震えており、若葉は彼女が何かから怯えていることを理解した。

そうか。怖いのは俺だけじゃないんだ。

いや、俺以上に怖いはずだ。

なんせその先にあるのは自身の死だ。なのに俺が尻込んでしまっただろうする。

「大丈夫。俺が守ってやるから」

彼女からしてみれば何も安心できる点など一切ないだろう。

しかし若葉は誠意を込め彼女の手を握り、笑ってそう告げる。

その告白に少女は思わず目を大きく見開き、頬にわずかながら赤色を取り戻す。

「はんツ、バカ……みた、い」

少女は鼻で笑う。続く口からは相変わらず悪態が飛び出しているものの、彼の言葉で安心できたのか、抵抗することは止め、落ちるように気を失ってしまった。

状況はどんどん悪手に回っている。足に巻いた服からもすでにポタポタと血が漏れ始めていた。

だがバカみたいなやり取りだったが、おかげで若葉は落ち着きを少し取り戻していた。

「明石、いてくれよ……」

若葉は少女を強く抱え、全力で来た道に戻り、明石の元へ走った。

◇

時は遡さかのぼること一時間ほど前。

少女こと白露しらつゆ型駆逐艦二番級艦船・時雨しぐれは応接室の一部屋にいた。

彼女はこの軍港のエースの一人、だったっ。

だが、前担当指揮官が退任したことが原因で体調を壊し、最終的には第一軍から降格。

いまは争いがあまりないことも手伝って仲間たちと模擬戦と言う名の簡単な運動をしながら日々を過すぎしている。

そんな彼女が今日ここに赴いた理由は新しく決まった担当指揮官との面談を行うためだ。

いったいどんな人が来るのだろうか。

時雨は少し期待するも、前の指揮官の傷がまだ残っていることもあってか、必要以上の期待しないでいた。

それにしても何かおかしい。

なのになぜ部屋に布団が敷いてあるのだろうか。この部屋は応接室のはずだ。誰かが住んでいるとはとてもじゃないが思えない。

「……」

一瞬、とあることを勘ぐるが、そんなまさかと嘲笑し、その考えを掻き消そうとする。

でもだったらなんのため？

だがその考えは消えてくれない。それでも時雨は必死に消そうと首を横に振る。

彼女の胸の中がどんどん曇っていく。

そんな最中、一つしかないドアが音を立てて開く。ドアの奥から現れたのは小太り、というには大きすぎる男。

「初めまして、時雨ちゃん。僕が君の新しい担当指揮官の黒畑だ」

暑苦しい巨漢な体格とは対極的に爽やかな挨拶をする男、黒畑は友好の握手がしたいのか、右手を時雨の方に差し伸ばす。

その誠実そうな振る舞いに少し信頼を覚えた時雨はスカートを押さえながら椅子から立ち上がり、それに応えるように手を伸ばした。

「白露型駆逐艦二番級艦船、時雨です。よろし——」

しかし、それは浅はかな判断だった。

黒畑の手は時雨の手をすり抜け、その更に奥にある身の丈に合わない、実った胸に手を添える。

「えっ？」

「ん、見た目以上の揉み心地だ」

想定外の行動に時雨は驚きのあまり、思わず呆気ない声を漏らす。だが黒畑はそんな彼女のことな

どおかまいなく、胸の上に置いてある手指をなめらかに動かせる。経験が少ないからか、その胸はただ若さゆえのハリが残っており、黒畑は感涙した表情を浮かべながら舌鼓を打つ。

当たり前な話だが、初対面にも関わらずフェイントをかけ、更にはこんな下衆なことを平気でする男など時雨は今まで会ったことなかった。

まるでお菓子を摘むかのように伸びるもう片方の手。狙いはもちろん時雨のもう片方の豊胸。

だが、時雨は黒畑の手が辿り着くより早く、その顔へ容赦なく、思いっきり拳を振るった。

「ぶぎやる！」

その拳は奴の顔になんの躊躇ためらいもなく受け入れられ、黒畑はそのまま向こう側の壁まで殴り飛ばされた。壁に叩き付けられた際の衝撃が部屋全体を揺らす。

「最低……」

投げ捨てるように時雨は呟く。

これが私の担当指揮官……？ 笑わせないで……。

「な、なにするんだ!？」

ヒロインテックに頬を押さえながら叫ぶ黒畑。

冗談で言っているのか。いや、冗談でも笑えない。もはや失笑もため息も出す気を失せていた。

「——死ね」

時雨はそう呟くと今度は足を大きく振りかざし、やたらめったらに黒畑の体を蹴る。

蹴って、蹴って蹴って蹴り続ける。何を言われても、足が痛んでも、時雨は本気で蹴り続けた。

「痛いっ、痛いっば！」

迫り来る時雨の蹴りを上手くガードしながら黒畑は怒鳴る。その身勝手な発言に時雨の怒りは更に燃え、連続した蹴りから重さを重視した蹴りに攻撃方法を変える。

「痛いッ、てえ……言っただろオ!？」

「しまッ……」

だがその攻撃は先の攻撃より隙が生まれる。それを見過ごさなかった黒畑はそう叫ぶと時雨の足を掴み、自身の方に引っ張る。

男としてのプライドか。いや隠していた本性が表に出てきたか。

不意打ちにふんばりをつけることが出来なかった時雨は体勢を崩され、頭を床で強打してしまふ。

「あつ、うぐ……」

視界が揺らぐ。目が回り気持ち悪い。頭も痛みと、まともな判断が出来ない中だが、時雨はいまが絶体絶命な状況だと理解する

だが黒畑からして見れば絶好の機会。その巨体をゆっくり持ち上げ、痛みもんぜつに悶絶する時雨を見て薄く笑う。

「ふひひ……」

先程触れようとしたら拒まれた胸も可憐うなだに項垂れている。恥部への入り口は言わずもがな。黒畑は舌で下唇を湿らせながら程よく肉ついた足を指で添いながら目的地を目指す。

「さわんなっ！」

目には目を。不意打ちには不意打ちを。

頭部は未だ痛む。だが不意とはこういう不利な状況で撃つものだ。時雨は齒を食いしぼり、痛みを我慢しながら醜悪しゅうあくな顔へ膝うがを穿つ。

「ぐっ!？」

「ていつ!」

不意な攻撃で思わずノックバックする醜い巨体。

上手くいった。まさに千載一遇せんざいいちぐうのチャンス。時雨はこの機を逃さない。すぐさま膨れ上がった黒畑の腹に蹴りを入れ、距離を取る。

「ぐ、ぐそうっ……またしても人間様の顔を……、このクソアマがあ!!」

「黙れ、このクソ野郎!」

酷く曲がった性格がどんだん表に出てくる黒畑。それに時雨は負けじと言い返す。

伸びる黒畑の手。その手が彼女を掴むより早く、時雨の足は黒畑の顎を蹴り上げ、そのまま流れるように身体を一回宙で翻ひるがえし、もう片方の足で顔面を蹴り飛ばした。

黒畑は成す術なく、口から血を吐きながら奥の壁の方に吹き飛ぶ。頭を強打した奴は壁から落ちるとともに意識を落とす。

逃げるなら今のうちか。そう見計らった時雨は部屋から退散しようとしてドアノブに手をかける。だが部屋を出るその前に、時雨の足は止める。そして横目で気を失っている黒畑を睨む。

「二度と私に近付くな」

そう吐き捨て、時雨は部屋から立ち去った。

◇

あれから何時間経ったのだろうか。時雨はふとそんなことを思いながら目を覚ました。

「……ここは？」

目の前に広がる薄暗いコントラストの白のタイルを見つめ眩く。横を振り向くと緑色のカーテンで隔離かくりされており、周囲は見えない。

時雨は体を起こすために床を強く押す。陥没かんぼつしていく手。その感触からここがベットのうたと気が付く。ということはあいつのところか。自然と先程の自問の答えが浮かび上がってくる。

ここは明石が営む雑貨屋「あかし屋」。

雑貨屋と一概に言っても通常の雑貨屋とは違い、日用品はもちろん、大砲の弾のような物騒な代物まで置いてあるのが大きな特徴だ。また明石の暇つぶしに開発されたユニーク商品も取り扱っており、

商品数を数えると万は悠々ゆうゆうに超すだろう。

だが驚くところはそこではない。商人としての誇りか。彼女はそれらすべての効能、置き場所、値段を把握している。

そんな商売の傍ら、彼女の本業である治療に関しても手を抜いていなかった。時雨は怪我をした膝に目を向ける。麻酔を使ったのか、感覚は未だ無いが白い包帯が巻かれ、綺麗に治療されている。

そして捻った足首も丁重に湿布が貼られている。ただこちらは感覚があり、確認のために動かした際に生じた疼きに近い痛み到时雨は顔をしかめた。

怪我の症状については後ほど明石から説明があるだろう。

そう思った時雨はもう一度ベットに体を預け、また見慣れない天井を見る。そして目を閉じ、頭上にある耳に精神を集中させた。

声は……聞こえない。隣から微かに寝息が聞こえるぐらいだ。

それを確認すると大きく息を吐き、全身をリラックスさせた。

だがその時だった。不意に扉が開く音が室内に響く。

「またお前かにゃ……」

店主の明石の呆れた声をあげる。

明石自身が呆れられることは多々あるものの、彼女がそのような声をあげるのは珍しい。

一体、相手は誰なのだろうか。時雨は気になって澄ました耳をそちらに傾けた。

「だって、時雨ちゃん見つからないんだもん」

その声を聞き、時雨は咄嗟に口元を押さえる。

黒、畑……!?!? なんで……なんでここに!?!?

「だってじゃなくて、明石は知らないって何度も言ってるにゃ。それに見かけたら連絡すると何度も言ってるにゃあ」

明石が嘘を言っていることは匿ってもらってる時雨は重々理解していた。

しかしその口ぶりから、黒畑はもうすでに何回もここに足を運んでいるようだ。ということは、もう目星のつくところには全て行ったと言うこと。時雨の全身に悪寒が襲いかかる。

「でもでもでも」

「教えた彼女の部屋には行ったのかにゃ？」

「行ったけど、もぬけの殻だった」

もちろん明石が彼に教えたのはただの空き部屋で、本当に時雨が在住する部屋は教えていない。

だがまるで犯人を捜すような口ぶりに流石の明石も眉をしかめる。

「じゃあ軍港から逃走でもしたんじゃないのかにゃ？ とにかくここには来てないにゃ」

あからさまな嫌悪の表情を露わにして明石は黒畑に冷たく告げる。

だが黒畑はその言葉を聞いても明石が怒っていることに気付いていないのか、最低な言葉を何食わぬ顔で言った。

「えー、それは困るな。まだぜんぜん遊んでないのに」

その言葉に明石は、そして時雨は耳を疑った。だが黒畑はまだ言葉を続ける。

「あいつ生意気だからな。今度会ったら腕の一本や二本へし折らないといけない。どうせだったら喋れなくなるまで顔面殴るのもいいかも。どんなに大怪我しても明石が直してくれるし、なんならダルマにしてもいいかもな」

頬を赤らめながら黒畑は語る。この発言は本気だ。時雨は体を震わせる。

「どっちが上か、あいつ理解していないんだよ。所詮、艦船は兵器。それ以下はあつたとしても、それ以上はない。まずはそれを髓まで教え込まないと」

一方、それを直に聞いていた明石は、黒畑が厚顔無恥な言葉を言い終わると同時に、長い裾に隠した工具を彼に向け問答無用に振りかざした。

「うわっ!？」

攻撃を仕掛けた彼女の姿が視界に入っていたからか、黒畑は寸差で攻撃を交わす。

しかしあまりにもアンバランスな体型で自重の制御が上手く出来ないのか、黒畑はぽよんと跳ねながら尻もちをついた。

「な、なにすんだよ!」

「……出て行け……」

「えっ？」

「とつとつ出て行けにゃ！」

明石は黒畑を怒鳴りつける。

そんな彼女を怒られている側は恨めしく睨む。しかし明石には手を出すことは出来ない。もし手を出せばこの軍港の全防犯システムが作動する仕組みになっているからだ。

黒畑は舌打ちを残してこの部屋から去って行った。

「……」

ドアが開き、そして閉まる音が室内に響く。

しかし、それでも時雨の震えは止まらない。

終わったの？ 私殺されなくて済むの？ 誰か、誰か教えて……。

「明石……」

「呼んだかにゃ？」

時雨の呟きに、明石は落胆らくたんの息を吐きながら答える。

そして彼女はカーテンの裂け目を開き、薄緑の髪と長すぎる裾を揺蕩わせながら時雨が身を隠すべツドの前に立った。

「起きてたかにゃ……」

「明石……あいつは？」

彼女は味方。それを理解してても全て疑わしく思ってしまう。

時雨は答えを求める。

「もう行ったにゃ」

その回答を聞き、時雨は信じたのか、肩を小刻みに震せながらもゆっくりと体を起こす。

その微かな動きから時雨は現在、身体的損傷より精神的損傷の方が激しいことを明石は知った。

しかし、身体の方も最適の治療を施したものの、手放しに山を越えたとは言い難い状態だ。それなのに、それ以上のレベルで心の方が傷付くなど……でたらめにも程がある。

明石は思わず表情を曇らせた。

一方、明石を信じる手負いの狼は、ふとあることを思い出す。

そう言えば私、どうやってここまできたんだっけ？

なぜ信じるという言葉がそのことに繋がったのかは疑問だが、無言の空間に響く小さな寝息。それが自分を介抱してくれた者のモノだと理解するのにそう時間はかからなかった。

「ねえ、明石」

「何にゃ？」

「私を助けてくれた人はそこにいるの？」

時雨は名も知らない彼のことを明石に問う。

事情を深く知らない明石であったが、時雨のその一言で二人は全くの赤の他人だということは理解したようだ。だがそれと同時に明石はある迷案を思いつき、心の中で細く微笑んだ。

いや、そのプランは上手く行けばこれ以上ない名案に繋がるのは違いないのだが。

「彼は幸代 若葉。早番で疲れてたんだろうにや。今は隣のベットでぐっすりにや」
明石はニヤニヤしながら隣のベットに繋がるカーテンを開く。

その先には昼間、時雨を介抱した茶髪の青年が幸せそうな顔で眠っていた。

「……」

幸代 若葉……。

時雨は彼を見つめながら心の中で何回も彼の名を繰り返す。

ああそうか、私はこいつを信じたんだ。

卑劣な顔の黒畑と違い、誠実そうな面持ちをしている。

でも、あの人とは違う。

当たり前か、と時雨は落胆にも似た深い息を吐く。

と言うか男に陵辱されたあとなのに何を思っているのか。期待したからこそ今傷付いているのではないか。

でも、でも……。

複雑な感情を胸に時雨は若葉をもう一度見る。

そう時雨が様々な思惑を馳せている中、明石はどこからホワイトボードをガラガラと音を立てながら引っ張り彼女の後ろに立つ。

しかし時雨はそのことに気付いていない様子で、明石は思わず眉をしかめた。

「で、今の君の状態にやんですが！」

「ひゃツ、ひゃい！ えっ!? うん、はい！」

明石は大きな声で時雨に声をかける。不意を打ったので驚かれることは想定内だったが、まさかこ

ここまで驚くとは。

短い悲鳴と共に少し宙に浮き、地に着くと同時ぐらいに明石の方に向き直った時雨を見て明石は微妙な表情を浮かべる。

「はあ……」

「な、なによ」

「なんでもないにゃ」

あからさまな明石の落胆の態度に時雨は顔を赤らめながら問いかける。しかし彼女自身も落胆される理由に心当たりがあったため、強く追求しなかった。

明石はコホン、と咳き込み、本題に入ることにした。

「時雨が今回負った怪我は大きく二つあるにゃ。一つは右足首を軽度の捻挫。と言ってももう一個の方と比べると軽傷の軽傷にゃ」

時雨は膝に視線を落とす。

「そんなに酷いの、これ？」

その問いに明石は深く頷く。

「内側付近にある上膝動脈という血管を傷つけてたにゃ」

ホワイトボードに描かれた膝の見取り図を指さし棒で押さえながら明石は丁寧に説明する。

そう、彼女が本当に怪我していたのは膝小僧ではなく腿ももの上にある膝の裏。捻挫ひねりをしてバランスを崩した時雨はなんとか均衡を保とうとしたところ背中からこけてしまった。その後、人目の付かないところへ移動する途中、何度もこけたことから膝小僧を大きく怪我したように見えたのだ。

心当たりと怪我の症状に納得する。同時に時雨は気になったことがあったのか、ふと声を零す。

「動脈？」

眩きと共に時雨は無意識に自身の手首を握りしめた。

「そう、それらの一種にゃ。通常怪我をした際に出血する毛細血管を脇道と表したとしたら、動脈は大通りと言っても過言じゃないにゃ。動脈からの出血は動脈性出血といって普通の出血とは比べ物にならないほど出血し、最悪の場合、多量出血によるショック死もありえる怪我なのにゃ。全く、発見

が早くてよかったにや〜」

そう呆れる明石を傍目はために時雨はもう一度、若葉を見た。

出会った時は気が立っていたこともあり、怪訝けげんな態度を取ったものの、彼がいなかったら今頃死んでいたかもしれない。

照れ臭いが彼が起きたら感謝の意を述べよう。

時雨は心の底でそう誓うのであった。

「でも私たちは艦船でしょ。出血程度で死ぬとは思えないわ」
しかし素直でない時雨は明石に強情な態度で言葉を返す。

「オイルを漏らした船が海上を自走できるとは思えないにや」

ホワイトボードを戻す明石はボソツとそう呟き、時雨に返した。

それに対し、時雨から特に言葉が帰ってこなかったことから、明石はその発言があくまで時雨の強がりだと言うことを知る。

「艦船が人間と同じ外因で死なないというのはあくまで仮説にや。事実、頭を強く打てば気を失う。」

アルコールを多量に摂取したら酔いもする。刃物で刺されたら怪我をする。人間と何ら変わりないにや」

「……」

時雨は何も答えない。そんな子供のような態度を取る時雨に、明石はため息を吐き、触れようとしなかった核心にあえて触れることにした。

「新しい指揮官が真正のクズだということは理解できるにや。でも、だからと言って無茶をしてはいけないにや。なにごとく健康が第一にや」

明石は本当に時雨のことを想い、そう言葉をかけた。

しかし時雨はその言葉を聞いた瞬間、態度を激変させた。

「急に押しかけてきて、その上ベットまで借りて悪かったわね。治療費は給料から差し引いといて」
そうぶつきらぼうに言葉を投げ捨てる時雨は一刻も早くこの場から去ろうとベットから降りようとしていた。だが床に足を着けた瞬間、時雨の足に電気が走ったような激痛が駆け抜ける。

「いっ、つう!?!」

「話はまだ終わってないにゃ」

足の痛みになりながら堪える時雨を見て明石はまたため息を吐く。

「治療は終わったけど膝が完治しているとは誰も言っていないにゃ。一週間、絶対安静にしてるにゃ」

一週間!? その長期過ぎる期間に時雨は驚きを隠せずいた。

一週間も動けないなんて。その間に奴が自分の部屋に訪れたら……。

恐怖が時雨の心を侵食する。

「大丈夫にゃ。まだ前の住所しか知られていないはずだから安心しろにゃ」

焼け石に水程度だが、明石が時雨に労いの言葉をかける。

だが時雨は肩を震わせ、「でも、でも……」と繰り返しており、とてもじゃないが明石の言葉が彼女に届いているとは言い難い状態だった。

明石は何があつたのかまでは敢えて聞かなかった。その代わりと言うわけではないが、明石は時雨を母のように優しく包み込む。

「泣いてもいいにゃ。たまには弱いところも見せるにゃ」

時雨の髪を擦る手は暖かく、乱雑に掴まれた時の痛みを吸い取ってくれているようで、そう思うと時雨の奥から何かが込み上げてきた。

嗚咽を漏らし始めた時雨の瞳からは次第に涙が零れ始め、明石の胸を濡らしていく。だが明石は嗚咽を泣きじゃくる彼女の背中を何も言わず優しく擦るのであった。

× × ×

「もう大丈夫かにゃ？」

「うん、ありがとう……」

赤く腫れた^{まぶた}瞼を擦りながら礼を言う時雨。

そんな時である。

「ん……」

若葉が目を覚ましたのか。うめき声を出しながら自身の腕を頭上に持って行っていた。

「おっと。ちょうどいいところでタクシーがお目覚めにゃ」

「タクシー……?」

その反応を見た明石はすぐさま若葉の方へ走り、彼の腹に馬乗り状態になる。

普通の女性がそんなことしたら思わず静止するが、今回は天真爛漫な、本物の猫のような明石だ。残された時雨はそれに対してツッコむことはしなかった。

だが彼女の残した「タクシー」という言葉には思わず首を傾げた。

「へい、タクシー。起きるにゃ。もう夜だにゃ」

「いくらなんでもそれは失礼すぎるでしょ……」

ボンボンと彼の腹を遠慮なしに叩く。もちろん力加減はされているのだろうが、その言動と言い、少し度の過ぎる明石の行動に時雨はツッコむざるおえなかった。

「おはよーございます……」

腹部の痛みで完全に覚醒したのか。若葉は身体を上げ、そして時間違いの朝の挨拶を告げる。

すぐさまその発言に明石が「いまは夜だにゃー」とツッコんだのは言うまでもないか。

そんなやりとりを時雨は呆れながらも微笑み見つめていた。

その視線に気付いた若葉は視線の先、時雨の方に顔を向ける。

「あつ、君、起きたんだ」

満面な笑みでそう告げる若葉に時雨は思わず圧倒されてしまう。

本当に絵に描いたようなお人好し。

気付けば時雨も再び笑みを浮かべていた。

「ええ、おかげさまで。ありがとう。それと気が立ってたとは言え、強く当たって悪かったわね。ごめんなさい」

頭も下げ、時雨は素直に若葉に対し礼と謝罪をする。

「いやいや、あんな状態だったら誰だってそうするよ」

対する若葉は照れ臭いのか。顔を赤くしながら両手を前でぶんぶんと振る。

昼に助けてくれた時とは全然違う彼の態度に時雨は思わず吹き出す。それに若葉は笑いながら空か

さずツツコミを入れ、和んだ雰囲気を辺りに醸し出した。

「うんうん。うまく仲直りしたみたいだにゃ」

そんな中を明石が割って入ってくる。若葉は特に驚きもしていなかったが、時雨はあからさまに嫌そうな顔をした。

どうせろくなことしか言わない。そんな時雨の想像は言わずもがなの中するのであった。

「じゃあ若葉。ベットを貸した代わりに時雨をおんぶして家まで送って行って欲しいにゃ」

「はあ!？」 「はあ!？」

思わず二人とも声を出し驚く。その反応に明石は不思議そうに首を傾げた。

「だっこのほうが良かったかにゃ？」

「そういう問題じゃないわよ、バカ！　なんで初対面の奴にそこまで世話を任せないといけないの!？」

明石の的外れな指摘に時雨は強くツツコミを入れる。

しかし含んだ笑みを浮かべる明石の顔を見て、自身が蜘蛛の巣にかかったことに気付く。

「時雨は若葉のこと嫌いかにゃ？」

「だーかーら、そういうんじゃないってえ！」

ぶんぶんと手を振り時雨は明石の発言を否定する。

しかし文句を持っているのは若葉も一緒だった。

「そうだよ！ 名前も知らない人の家にずけずけと行けなんて無理だつて！」

「彼女は白露型駆逐艦二番級艦船・時雨。これでいいかにゃ？」

「雑ッ!! なにそれ、簡単に紹介するにしてもあまりにも雑すぎない!？」

若葉の発言に頷いていた時雨は勝手に、しかも雑に紹介されたことに思わず驚く。

もつとも若葉は彼女の名前や艦船だということは時雨が意識を失っているうちに知っていたが。

「いや、そういうのじゃなくて……」

若葉は思わず落胆の息を漏らす。

「とにかく、とつとと帰れにゃ。時雨は一週間毎日定期検診に行つてやるから大人しくしてろに

ゃー！」

自分は十分に楽しんだからか。明石は急にぶっきらぼうな態度になり、若葉と時雨の背中を叩き急かす。

「痛っ!? 怪我人叩くな、バカ猫!」

思わず時雨は苦情を言う。その態度はいつもの時雨で黒畑に恐怖していた姿は完全に消えていた。それを確認した明石は内心で細く微笑む。

これは思ったより良い方向に進みそうだなや、と。

「ほーらほら、とっとと裏口から帰れにや!」

「そこまで言うなら車椅子ぐらい用意してくれたらいいのに……」

「確かに」

「何か言ったかにゃ?」

「言ってますーん」

「……まっ、時雨のこと、よろしく頼むにや。……そう言えば若葉。これ」

思い出したかのように明石は若葉に一枚のジャケットを手渡す。時雨の足に巻いた作業着だ。

「あっ、ありが……どう？」

しかしその服には時雨の血痕も、仕事で付いた汚れすらも一切消えていた。

「あかし屋の新商品予定の『なんでもオトース』の実験に使わせてもらったにや。だから今回はお代は取らないにや。残念にやがら」

「そりゃどうも……」

最後の一言が無ければ可愛げがあるのに……。

明石はどんな些細なことでも高い金額を要求することで有名だが、そのぶん仕事もちゃんとしてくれる。

若葉はそのことを噛みしめるように再確認し、明石の商人魂に脱帽しながら、下ろし立て同然の服に袖を通す。

「お待たせ。えーっと、時雨さん？」

「呼び捨てでいいわ。私も呼び捨てで呼ばしてもらおうし」

軽快な笑みを浮かべる彼女に若葉は頷き、返事を返す。それを見て若葉は少し重荷が下りたような気がした。

正直な話、最初に警戒されてからもっと堅苦しい、というより一癖二癖ある面倒な性格の持ち主じゃないかと彼は疑っていたのだ。

しかし話してみれば案外素直で、愛らしい見た目と相まって非常に好感が持てた。

これを機にタメ語で喋ってみよう。若葉は心の中で彼女への態度を改めることにした。

「わかった。じゃあ時雨。行こうか」

若葉はさっそく有言実行。タメ語で時雨に話しかけてみた。

「うん」

彼女は少し笑みを固くしたが、急に変えた言葉使いに対しては特に追及なく、手ごたえを感じた若葉は思わず頬を緩めてしまった。

だが対する時雨は今そんなことを気にする余裕はなかった。

いざ男の人の背中に乗るとなるとなぜか急に緊張してきていたのである。

「その……失礼します……」

重くないかな？

太ってないかな、私？

てかなんで好きな人でもないのにこんなにドキドキしてんのよ、私、バツカじゃないの!?

時雨は一人、心の中で悶え苦しむ。

しかしそれは彼女を待つ若葉には通じない。中腰で待ちぼうけ状態になっている彼はいつまでも背中に乗らない彼女に声をかけた。

「時雨？」

「ひゃ、ひゃい!？」

彼の声で我に返る時雨は思わず情けない声を上げてしまう。その頬は林檎のように赤く染まってお
り、それを見た若葉は首を傾げた。

「えーっと、乗らないの？」

顔を赤らめている理由も問いたかったが、そこは触れてはならない領域だと悟った若葉は少し言葉を濁しながら彼女に問う。

そして時間と言う概念を思い出した時雨は彼の問いの理由に気付く。

しかし「私、重くないかなって気になってたの」などと愛らしく言うことなど到底できるはずがなく、時雨は理不尽と理解していながらも彼に八つ当たるように怒鳴りながら答えた。

「乗る。乗るわよ、バカ！」

前言撤回。若葉はさきほど思った「一癖二癖ある性格ではない」という解答を取り消す。

こいつは面倒な部類の性格だ。頬を膨らませながら背中に飛び乗る彼女を見て確信した。

時雨が飛び乗った際、若葉の手に柔らかい肉の感触が広がった。

これはふともも？ 若葉は手に掴むその肉を二回ほど、もにっと揉んでみた。

「ふやあ!？」

時雨が情けない声を上げる。

ああ、やっぱりふとももだ。その声が妙にしっくり来たのか、若葉は一人深く頷き納得する。

だが揉まれた側は何一つ納得していないようだ。次の瞬間、時雨は若葉の頭に拳を降ろした。

「いッ、たあ!?! なにすんだよ」

「なにすんだよ、ってそれはこっちのセリフよ!! 誰に許可取ってふとももに触ってるのよ、変態!

腕組みなさい、腕! 警備部呼んであることないこと全部言うわよ、バカ!」

続けて二発、三発とバカの頭に降り注がれる拳。

最ッ低。一瞬でもコイツを信じた私がバカだった。やっぱり男なんてみんな一緒よ。

時雨は更にもう一発、拳を若葉の頭にぶつけた。

「いたいっ! 悪い、悪かったって! 頭を叩くなっば!」

「明石! やっぱり一人で帰るから車椅子用意して!!」

「お前ら、もうちよい仲良くしろにや……」

目の前で夫婦漫才を繰り広げる二人に明石は思わず落胆の息を零す。

◇

それから数分後、二人の間はなんとか丸く収まり、仲良くあかし屋を後にした。

あかし屋を出てからの二人はやけに静かだった。

いや先ほどが五月蠅うるさすぎただけであり、別に会話が無いなんてことはない。

しかしどちらもどこか遠慮しているようで、ついさつき腐れ縁のように喧嘩していた奴らには見えない。

そんな傍ら、ふと若葉はメインストリート前で足を止める。

メインストリートは軍港の中心部に位置する。なので彼女の部屋がどこにあらうと、ここまで来ればアクセスは多少容易いだらう。

時雨もそのことを知っていたため、立ち止まったことに特に違和感を感じなかった。

「で、お前の家はどこなんだ？」

問われた時雨は真っ直ぐ先に指を伸ばす。

「メインストリートをこのまま超えて、そう私が倒れてたその先」

「……ふん？」

この先って……。

「どしたの？」

「いや、なんでもない。行こう」

ある疑惑が若葉の脳裏を掠めたが、とりあえず気にせず、言われるがままに足を運ばせる。

そして数秒後、彼が時雨を見つけるきっかけとなった血が飛び交っている場所についた。

おそらく時雨の家はこの先にあるのだろうが、若葉は一時足を止める。血痕の何個かは電柱に照らされ、微かに残る赤が発光していた。

「うわっ、なにこれ」

それだけで状況の悲惨さが理解できたのだろう。それを見た時雨はすぐさま驚く。

「なにこれってお前の血だろ」

呆れたように若葉は彼女に告げる。

まさかここまで痛々しい状況になっているとは……。

そんなこと想像だにもしていなかった彼女は啞然あぜんとした表情を浮かべる。ここでこの状況なら足が冷たくなるのを感じていた発電所付近はどうなっているのだろうか。

「えっ、じゃあなに。発電所付近はもっとヤバイことになってるの?」

若葉は一秒も間を置かず頷く。

「しばらくしたら蠅が湧くレベルで酷い有様になってる」

あの時、恐怖で震えていた若葉を罵倒ばとうしたが、時雨はいまなら恐れを抱く気持ちもわかる気がした。

「あはは。なるほどお……。妙に説得力のある解説どうも」

「行くか?」

「行かない」

即答だった。もつとも若葉も冗談で言ったままで、本当に行こうとは思っていない。というか二度とあんなもの見たくない。血の匂いを嗅かぐのも当分のあいだ勘弁だ。

彼はクスリと微笑した後、再び足を動かしてこの場を後にする。

「ところでなんであんな大怪我したんだ？」

「それがこけたのは覚えてるんだけど、なんでこけたのかは思い出せないのよね」

「どういうことだ？」

「明石いわく、こけた際に強く頭を打ったせいで記憶が一部飛んでるって説明されたわ」
時雨は明石という裏付けには体の良い存在を利用し、嘘を並び立てる。

そう、嘘。本当は全部覚えている。

だがこれっきりな関係な彼をこれ以上巻き込む気はない時雨はあえて嘘を吐く。

「ふん、大変だな。お前も」

それを信じたのか。それとも薄々気付きつつもあえて触れなかったのか。

若葉は自分から振っておきながら他人事のように言葉を吐いた。

しかし。今更な話だが時雨はいつこの男に襲われてもおかしくないことを思い出す。でも黒畑に襲われるよりはマシか。

一時的な衝撃と常設的な欲望は違う。理由が違えば襲われる方も受け入れ方が変わる。

……まるで一時的な衝動だったら襲われても構わないような言い様だ。

バカじゃないの、私。

時雨は気付かれないように小さくため息を吐き、悪態をつく。

「ところでさ、さっきの白露型うんたらかんたらって肩書なんなの？」

それから自分から振った話題ではあるが、さっそう颯爽と変えたかったのか、若葉は先程気になった時雨の名乗りについて齒に衣着せずストレートに聞いてみた。

それを聞いた時雨は思わず罵倒ばとうの言葉が零れ出る。

「はあ、アンタ馬鹿なの!? 何が肩書よ、あれは今の私の正式名称。時雨は愛称でしかないわ」

流石に本名にケチ付けられたら怒るか。今回ばかりは自分が悪いと反省する若葉。

一応若葉をフォローしておく、本来上層部や指揮官クラスでない艦船たちとは交流すること自体ほぼない。

なので艦船の名前の規則性など知る由もなく、先程の名乗りを疑問視するのは当然だった。

だがまあそれをストレートに聞いたのは若葉の落ち度であり、外国の者と重桜の者とは名前の規則性が違うように自然に察することも可能だっただろうに。

彼はそれを前提としなかったのだ。怒られて当然だろう。

しかし「今」とはどういうことなのだろうか？ 疑問が疑問を呼ぶ。

「悪い、悪い。でも今ってどういうことなんだ？ 時雨は時雨のままなんじゃないのか？」

それを聞いた時雨の口から深く重いため息が吐き出される。

「アンタ、本当に技術者なの？ そもそも艦船ってなにか理解してる？」

まさか自分の職業を否定されるとは思わなかった。これはなんとしてでも挽回せねば。

若葉はそう意気込み、固唾を飲みこんだ。

「もちろん知ってるさ。」

艦船、正式名称はKANSENで、これはユニオンの言語で

• K || Kinetic

• A || Artificial

• N || Navy

• S || Self regulative

• E || Enlore

• N || Node

の略にあたる。重桜の言葉に直すと『自立型対セイレーン海域兵器』を示す、だろ？」

自慢げにそう語るものの、そのあとに言葉が続かない。つまりここで話は終わりと言うことだ。時

雨はげんなりした顔で若葉を見る。

「そんな基礎知識を言われてもねえ、私困るんですけど」

「なっ!？」

ショックを受けるもののそれ以上の説明が出来ないのも確かであり、少したじろいでしまう。そんな若葉を見兼ねて時雨は小さく息を吐き、。

「しかと耳かっぽじってききなさいな。」

艦船と言う存在は生まれてからずっと永遠にこの身体のまま時を過ごすの。生まれる以前の、幼年期と言う記憶は持ち合わせてないわ。その代わりと言ってはあれだけどモデルになった過去の船の辿った記憶は断片的に残ってるの。私の場合はそんなに残ってないようだけど、中には轟沈する瞬間がフラッシュバックして精神に異常をきたす子もいるって聞くわ」

とんでもないことをサラツと言っているが、それは他人の記憶が勝手に記憶されていると言うこと。もし自分に記憶がないことが勝手に思い返されたら精神に異常をきたすのは当たり前だし、それが轟沈の場面なら言うまでもない。

自分に置き換え想像した若葉は思わず全身に鳥肌を立てた。

「そんな過去も身寄りもない私たちに唯一与えられた自由が名前なの」

「名前……」

「そう。貴方も人間と言われるより若葉と呼ばれた方が嬉しいでしょ？ それと一緒によ。」

でもね、私たちは大好きな人以外に名前と呼ばれたくないの。大好きな人以外に名前を授けて欲しくないの。それがその人との絆であり、繋がりなのだから」

「だから敢えて兵器としての名前を実名として活動してるのか」

「そ、なまじ記憶があるから違和感も少ないしね」

と乾いた感じで語っているが、そんな悲しすぎる生命に彼女自身も思うところがあるのか、甘えるように若葉の背中に胸を押し付けてくる。

「ホント、兵器なんか意志なんて付けるなっていつも思うわ」

そうすれば前世の記憶の阻隔なんて気にもしないのに。

艦船の在り方に疑問視する時雨。それはどの艦船も潜在的に抱えている問題であり、「人として生きるか、兵器として生きるか」というもう一つの艦船の問題にも通じるものだ。

そんな大真面目な話をしているにもかかわらず、時雨の程よく育った胸の感触が男としての理性を刺激する。

仕方ない。彼は生粋の童貞なのだ。胸押し付けられた程度でも反応を示してしまうのもわけがない。頑張れ若葉。負けるな若葉。お前ならできる。若葉はそう自分に発破はっぱをかける。急に歩みがぎこちなくなる。そのことを疑問視した時雨は若葉の顔を覗く。

「なんで顔赤くしてるの？」

なんて羞恥プレイ。きつと意地悪な笑みを浮かべているのだろう。

若葉は悔しさを抑え、平然を装い答える。

「えっ？　そ、そんな、赤くなんてなってないよ!？」

だが時雨からしてみると本当に謎だった。よもや無意識くっつけた胸が原因なんて気付けるはずがない。

「いやなってるって。あつ、そこ右ね」

「み、右しかいけねーよ」

島の端に位置するのか、前も左も海で右への道しかなかった。曲がると先には森と海岸に囲まれた赤い屋根とベージュの壁の二階建てのアパートがあった。

「あつ、あれあれ。あそこが私が住んでるアパート」

更に胸を押し付け、前のめりになりアパートに指をさす時雨。

感触に若葉は思わず我を忘れそうになるが落ち着くため一息吐く。そしてやっぱり想像通りだったので、ここでカミングアウトすることにした。

やっぱり、見慣れた家だ。

「うん。ここ俺が世話になってる寮」

「いや私が住んで……えっ？」

驚きで開いた口が塞がらない。時雨の頬が引き攣^くっていく。

「まさかと思うけど部屋は？」

「一〇六号室」

「……嘘でしょ？」

若葉はそれに対して何も答えず、右端の一〇六号室の前まで足を進める。そしてポケットから鍵を取り出し、一〇六号室の扉を開けた。

それを見ていた時雨の口から言葉は出てこない。

「そこ私の部屋」

時雨が指差したのは一〇五号室。そう、お隣だ。

そんなこと言われなくても若葉は知っていた。だってこの住人は二人だけなのだから。

両者共に思わず深いため息を吐き、沈黙してしまう。

「飯とかの話しようと思ったけど、する必要なくなったな」

「そうね。悪いけどしばらくの間よろしくお願いするわ……」

お願いされてしまった……。

しかし、これは明石からも頼まれたことだ。若葉は「へいへい」と悪態をつきながらも承認する。

さて、と。ここまで問題なく来れた。

しかし問題なのはこれからなのだ。

次にやらなければいけないことは実に明確。彼女を自室の落ち着けるところに降ろす。

口で言うのは簡単だ。だがその前に異性問題が若葉の行く手を阻む。

いやそれ以前の話か。ほぼ初対面の奴を部屋に通すわけがない。少なくとも自分ならそうする。

若葉は小さく頷く。

しかし、だからと言ってここで降ろすわけにもいかないし……。

若葉の足はたじろぎ、歩みを進めることが出来ない。

その問題は時雨も理解している。

あまり自室を見られたくないのだが、億劫している間はないか。ポケットから自室の鍵を取り出し
見つめる。

「あてっ」

時雨が持つ鍵が若葉の頬を軽く叩く。

見ず知らずの自分に文句……は言ったが、連れて来てくれたのは彼だ。それなりの誠意は見せてもらった。

ならば無駄な睨み合いなどせず、自分も誠意を見せるべきだろう。

「ん、鍵」

「えっ？」

「えっ？ じゃないわよ。まさか怪我人をここに置いて自分だけ帰るつもり？」

「いや、そんなことはしないけど……」

しかし素直になれない。悪態に困惑する彼を見て時雨は自分勝手に焦る。

「じゃあとつととして。足が疲れてきた」

焦った挙句、出た言葉は捨て台詞で、恥ずかしくなった時雨はふいっと顔を背けた。

そんな彼女の感情を知る由よしもない若葉はただ八つ当たられたとしか感じず、流石に怒りを覚える。

だが、もたついていたことはこちらの非だ。それにここで言い争っても仕方ない。

そう、あえて前向きに考えることで何とか怒りを飲み込む。

若葉は無言で鍵を受け取ると慣れた手つきで鍵を開ける。そして開かれた玄関の扉。真つ暗な部屋の中、若葉は玄関横の壁に手を沿わす。

確かこのあたりに照明のスイッチがあつたはず……。

数秒後、カチリと言う音と共に辺りの照明が点灯し、今まで見えなかった時雨の部屋の全貌が明らかになる。

「……」

部屋とは己の内面だ。部屋が汚いと頭の整理が出来ていないと認識されたり、綺麗だと几帳面な正確だと思われたりする。

時雨の部屋の内部を見て、若葉はふとそんなことを思い出す。

いやはや。入るまで特に気にしていなかったが、いざ見てみると意外な発見、もとい驚きもあるものだ。

若葉は無意識に感嘆かんとんの息を零す

「……なによ、何か言いなさいな」

「いや意外にも女の子なんだなって……」

部屋の作り自体は若葉の部屋と大差ない1DK。玄関は玄関と呼んでいいかわからないほど質素で、右の壁に沿う形で一人用木製ベットが置かれている。左側の奥にはトイレと風呂場がある別室が二つ。しかし壁紙は女の子らしくピンクで、テレビの横にある正方形の多段棚には動物のぬいぐるみや造花が飾られていた。

他にも室内用スリッパは可愛らしい犬をあしらったものだったり、ところどころこだわりを感じる。

正直な感想を言えば意外だった。

そして安心した。彼女は少し、いやかなり暴力的な性格をしているため室内は殺伐としているか、もしくは男物が色々あるんじゃないかと少し疑っていた。

だがこの室内を見る限り、少し不器用な年頃の女性だということが感じ取れる。

「……笑いたかったら笑えばいいじゃない」

日頃からそうだ。姉妹以外には基本的に辛辣しんらうにあたるためか、女性らしく一面を見せるといつも驚かれる。

そしてみんなこう言う。「なんか時雨らしくない」と。

彼もまた同じ感想を抱いたのではないか。そう感じた時雨は眉を下げ、視線をそむける。

まあ構わない。どうせこの足が治るまでの関係だろう。

痛む心もそれまで我慢し続ければいい話だ。

すると時雨のリクエスト通り、若葉から笑い声が返ってきた。

だが続く言葉は予想していたものと違った。

「ははっ、そんなに卑下ひげになるなよ。女性らしい部屋で良いじゃないか」

「えっ?」

「最初はサンドバックとか置いてたるんじゃないかなって思ったし」

開いた口が閉まらない。そんなこと言われたのは初めてだった。

「それはそれで失礼な話ね」

「悪い、悪い」

また時雨は不機嫌そうに頬を膨らませる。だがすぐに表情は明るくなり、クスクスと笑い出す。

その笑い声を聞く若葉の表情も自然と綻ほくろぶ。そしてベットのほうに向かい、ゆっくりと時雨をその上へ座らせるように降ろす。

「んっ、ありがとう」

ゆっくりであつたがちよつとの衝撃でも傷口に干渉するようだ。不意な痛み思わず表情が歪んでしまう。

「悪い、痛んだか？」

「ううん、大丈夫」

「そうか、痛かったら言えよ？」

気遣いが嬉しい。嬉しいのだが、妙に恥ずかしい。

「あ、ありがと……」

「じゃあ靴脱がすから足伸ばして」

時雨は若葉の要求を素直に聞き、足を伸ばす。

「少し痛むかもしれないけど我慢しろよ」

時雨は静かに頷く。それを確認した若葉は時雨の足に手を沿え、靴を脱がしていく。

自分で出来ないんだ、やってもらうのは仕方ないこと。

そう理解しているのに恥ずかしさが拭えない。それどころか更に込み上がってくる。

「はい、じゃあ次はもう片方の足を上げて」

故に。

「ほい、終わったぞ。スリッパ持ってこようか？」

「……たい……」

「は、あ痛っ!？」

「このヘンタイ！ バカ！ 死んじゃえ！」

急に振り下ろされる拳。

当たり前のように若葉は困惑、そして怒る。

「さっきから下手に出ればデカイ態度取りやがって！ いい加減にしろよ!!」

「うっさい！ 足触ってた手つきが完全に性犯罪者の手つきだったって言ってるのよ！ どうせ今までもイヤらしい目で見てたんでしょ!?!」

「見るわけないだろ。お前みたいな胸だけのお子様には誰が欲情するかよ」

「きく！ ちょっとそこに座りなさいな！ その顔面思いつきり殴らないと気が済まない!!」

「誰が殴られると知ってて座るんだよ。お前の方がバカなんじゃないか？」

こうして慌ただしい介護生活が幕を開けるのであった。

◇ 続く